

発刊にあたって

いづえ地区まちおこし協議会では、平成28年度に歴史研究会を立ち上げ、地域の豊かな史跡を訪ねてまいりました。先人の残した数々の宝物、建造物、言い伝えをたどり、心揺さぶられ、ここにその集大成として小冊子にまとめることとしました。

七日市・上出部・笹賀・下出部・古墳の各編に分けて作成しましたが、何分にも数が多く、全部を掲載することができなかった個所はご容赦ください。

この本がふるさとを知る手掛かりになるとともに、後世につなぐみちしるべとなり、郷土愛がさらに育まれれば、こんなにうれしいことはありません。

終わりに、編纂にあたり多大なご尽力とご執筆を賜りました吉澤泰夫氏に幾重にも敬意と感謝を申し上げます。また、地元の多くの方々のご協力をいただきましたことに心からお礼を申し上げます。

時空を超えて ふと立ち止まり

いにしへのロマンを求めてみては

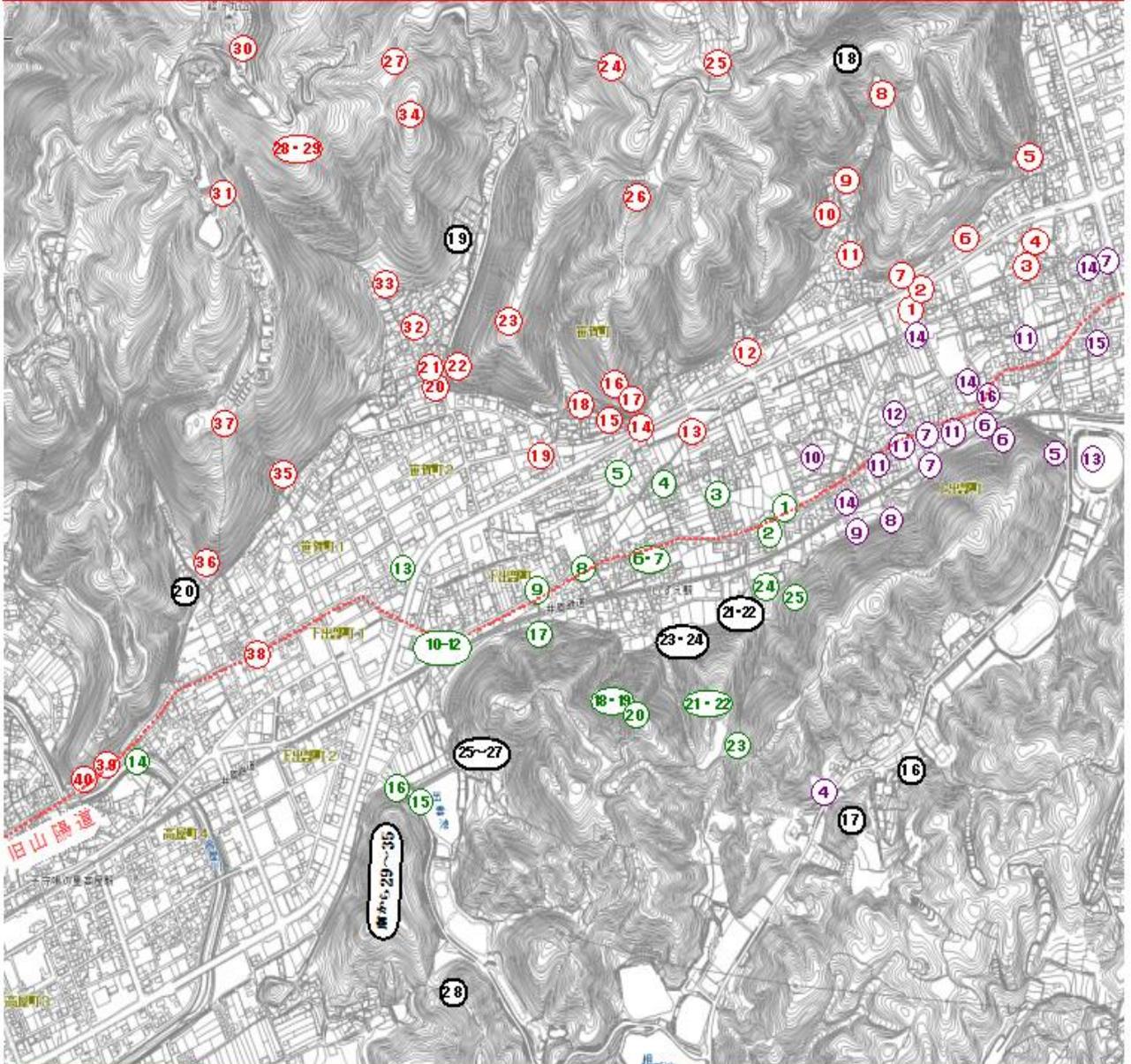
いづえ地区まちおこし協議会

前会長 安井佐代子

目次		ページ	藤代源治碑		⑩ 「水越」の庚申橋
発刊にあたって・目次		1～3	⑫ 稻荷神社		
史跡分布図		4・5	⑬ 木野山神社（神輿山）		
七日市編		6	⑭ 石鎚神社日之出講御神体	18	笹賀編
① 井領堂（大師堂）			⑮ 木野山神社（花野）		① 恋の川観音堂
② 武速神社		7	⑯ 花野池		①-1 貴宝院長学供養塔
②-1 恵美寿神社		8	上出部編	19	①-2 曼荼羅石碑（光明真言塔）
②-2 荒神社			① 正一位王山稻荷神社		①-3 首なし地藏
②-3 水神社			② 鎌田城跡	20	①-4 牛供養碑と五輪塔
②-4 地神碑			③ 寺子屋を開いた安井権頭 ・安井大賢の墓		①-5 井原西国三十三観音 霊場十七番観音堂
②-5 茅輪神社			④ 曼荼羅石碑（光明真言塔）	21	①-6 宝篋印塔
②-6 総社稻荷神社		9	⑤ 正一位王産稻荷神社		①-7 恋の川与五郎井筒
②-7 巖島神社			⑥ 岩山神社（岩山宮）	22	② 石鎚神社元老顧問石丸治作碑
②-8 菅原神社（天神社）			⑥-1 御崎神社		③ 八荒神社・井森神社
②-9 瘡神様			⑥-2 地神碑		③-1 十二神社
②-10 王山稻荷神社			⑥-3 三寶荒神社（元高社）	23	③-2 地神碑
②-11 下山神社・黒丸神社		10	⑥-4 妙見神社		③-3 地藏堂
②-12 盃状穴のある 武速神社の手水鉢			⑥-5 恵美寿神社		④ 大正井戸
②-13 袋静の句碑			⑥-6 水分神社（竜王様）		④-1 阿弥陀堂
②-14 武速神社のむくの木			⑥-7 金毘羅神社		④-2 曼荼羅石碑（光明真言塔）
③ 天王山大師院			⑥-8 十二神社		⑤ 起木の薬師堂
③-1 鎮守堂		11	⑥-9 日露戦争戦勝記念碑	24	⑤-1 井原西国三十三観音 霊場二番観音堂
③-2 井原西国三十三観音 霊場十八番観音堂			⑥-10 岩山神社常夜燈		⑤-2 道しるべ
④ 七日市本陣跡の碑			⑥-11 道しるべ		⑤-3 四角柱の道しるべ
⑤ 七日市駐車場の石柱		12	⑥-12 献薫盤		⑤-4 起木薬師堂周辺石碑
⑤-1 七日市駅跡			⑥-13 御旅所の休み石		⑥ 虚空蔵堂
⑥ 伊達大蔵屋敷跡			⑥-14 御手洗井筒		⑦ 笹賀稻荷
⑦ 笠岡往来、笠岡小路・井原小路			⑦-1 出部駅跡		⑧ 金鋪寺本堂
⑧ 井原堤の桜			⑦-2 いづへの石柱	25	⑧-1 備中西国十四番 花山法皇霊趾塔
⑨ 日芳橋の架橋		13	⑦-3 井笠鉄道廃線跡・桜木附近		⑧-2 東照権現堂
⑩ 朗廬・芳郎・警軒・諫山 遺蹟北五丁の石柱			⑧ 井原西国三十三観音 霊場十六番観音堂		⑧-3 宝篋印塔
⑪ 井原西国三十三観音 霊場十九番 観音堂		14	⑨ 井原西国三十三観音 霊場十五番観音堂		⑧-4 井原西国三十三観音 霊場六番観音堂
⑫ 火御崎神社			⑩ 原地蔵堂		⑧-5 大師堂
⑬ 七日市駅 川越し上がり場跡			⑪ 恵美寿神社	26	⑧-6 井原西国三十三観音 霊場四番観音堂
⑭ 常夜燈			（上町・中町・下町・後的場）		⑧-7 曼荼羅石碑
⑮ 佐藤津留碑		15	⑫ 天神社（菅原神社）		⑨ 金敷寺
⑯ 花山跡		16	⑬ 九沓池（こぶつ池）跡	27	⑨-1 鐘楼と大師像
⑰ 岡ノ堂荒神社			⑭-1 古井の川		⑨-2 護摩堂
⑱ 井原西国三十三観音 霊場二十番観音堂			⑭-2 鯉の川（堂弦）井筒		⑨-3 お砂ふみ聖観音 及び百観音石仏
⑲ 法界碑			⑭-3 鹿木戸井筒		⑩ 子の権現
⑳ 牛供養碑		17	⑭-4 軍の森井筒	28	⑪ 金鴨寺
㉑ 石鎚神社贈元老顧問			⑭-5 川上井戸（桜木井筒）		⑪-1 キリシタン灯籠
			⑭-6 昭和井戸		⑪-2 右近の橋
			⑮ 杉ノ木三寶荒神社		

笹賀編

- | | | | | | |
|---------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|---------------------------|---------------------------|
| ① 恋の川観音堂 | ②-1 十二神社 | ② 金剛寺本堂 | 及び百観音石仏 | ⑩-11 阪田翁頌徳碑 | ⑩ 地神碑 |
| ①-1 寶宝院長学供養塔 | ②-2 地神碑 | ②-1 備中西国十四番 | ⑩ 子の権現 | ⑩-12 井原西国三十三 | ⑩ 正一位最上稻荷神社 |
| ①-2 曇荼羅石碑
(光明真言塔) | ②-3 地藏堂 | 花山法皇墓址塔 | ⑩ 金剛寺 | 観音霊場三番観音堂 | ⑩ 山上楼 |
| ①-3 首なし地藏 | ②-4 大正井戸 | ②-2 東照権現堂 | ⑩-1 キリシタン灯籠 | ⑩-13 仁王門
(木像金剛力士像) | ⑩ 墓の神 |
| ①-4 牛供養碑と五輪塔 | ②-1 阿弥陀堂 | ②-3 宝篋印塔 | ⑩-2 右近の橋 | ⑩-14 地神碑と金剛寺碑 | ⑩ 八荒神社 |
| ①-5 井原西国三十三
観音霊場十七番観音堂 | ②-2 曇荼羅石碑
(光明真言塔) | ②-4 井原西国三十三
観音霊場六番観音堂 | ⑩-3 曇荼羅石碑
(光明真言塔) | ⑩ 常夜燈と地神碑 | ⑩-1 虎の足跡 |
| ①-6 宝篋印塔 | ②-3 起木の薬師堂 | ②-5 大師堂 | ⑩-4 弘法大師一千百
五十年遠忌増法楽塔 | ⑩ 笠沢井筒 | ⑩ 井原西国三十三観音
霊場五番観音堂 |
| ①-7 恋の川与五郎井筒 | ②-1 井原西国三十三
観音霊場二番観音堂 | ②-6 井原西国三十三
観音霊場四番観音堂 | ⑩-5 弘法大師
一千年忌墓會堂 | ⑩ 牛供養碑 | ⑩ 多田地 |
| ② 石籠神社元老顧問
石丸治作碑 | ②-2 道しるべ | ②-7 曇荼羅石碑
(地藏真言塔) | ⑩-6 石の地藏坐像 | ⑩ 道しるべ | ⑩ 井原西国三十三観音
霊場七番観音堂 |
| ③ 八荒神社・井森神社 | ②-3 四角柱の道しるべ | ② 金敷寺 | ⑩-7 宝篋印塔 | ⑩ 笹賀八幡神社 | ⑩ 文学のこみち |
| | ②-4 起木薬師堂
周辺石碑 | ②-1 鐘楼と大師像 | ⑩-8 石の地藏立像 | ⑩ 稻荷神社・彌伽神社 | ⑩ 経ヶ丸讃歌の碑 |
| | ② 虚空蔵堂 | ②-2 護摩堂 | ⑩-9 鐘楼 | ⑩ 初大明神 | ⑩ 宝大神社 |
| | ② 笹賀稻荷 | ②-3 お砂心み型観音 | ⑩-10 英霊堂 | ⑩ 横田井筒 | ⑩ 常夜燈と川附公民館
・主要道路建設記念碑 |
| | | | | ⑩ 常夜燈と川附公民館
・主要道路建設記念碑 | ⑩ 荒神社 |



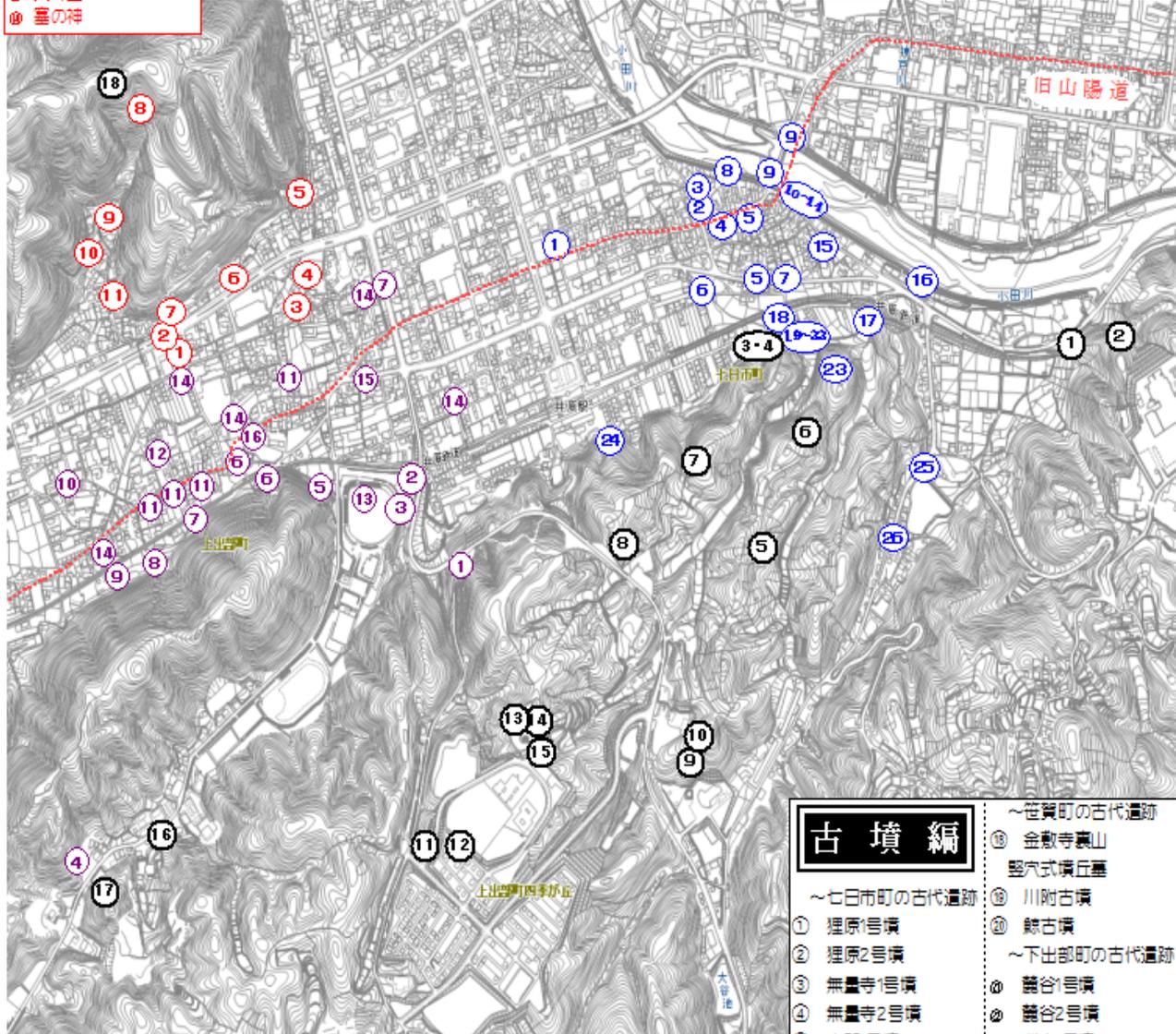
下出部編

- | | | | | | |
|-----------|-----------|-------------------------|---------------------------|-------------------------|-----------|
| ① 一里塚跡 | ④-3 荒神社 | (でんくら堂) | ⑤ 出雲池 | ⑩-5 十八基大型五輪塔 | ⑩ 石籠神社 |
| ② 土手井筒 | ④-4 龍王楼 | ⑩ 井原西国三十三観音
霊場十二番観音堂 | ⑤ 岩崎山 | ⑩-6 宝篋印塔 | ⑩ 戸木荒神山城跡 |
| ③ 伊達大蔵の墓 | ④-5 地神碑 | ⑩ 旧山陽道大曲
(おおまがり)跡 | ⑦ 常福庵寺跡 | ⑩ 岩屋観音 | ⑩ 山上楼 |
| ④ 下出部八幡神社 | ⑤ 菅田井筒 | ⑩-1 道しるべと水俵点 | ⑦-1 井原西国三十三
観音霊場十四番観音堂 | ⑩-1 岩屋十一面観音堂 | ⑩ 墓の神 |
| ④-1 菅原神社 | ⑥ 小塚荒神社 | ⑩-2 井屋元水源 | ⑦-2 曇荼羅石碑
(光明真言塔) | ⑩-2 岩屋十一面観世音
磨崖仏 | ⑩ 戸木荒神社 |
| ④-2 稻荷神社 | ⑦ 道標(里程標) | ⑩ 腰折地藏 | ⑦-3 行者碑 | ⑩ 井原西国三十三観音
霊場十三番観音堂 | ⑩ 正一位稻荷神社 |
| | ⑧ 舟夜燈 | ⑩ 金尾鹿堂 | ⑦-4 大乗妙典供養碑 | | |
| | ⑧ 懸目碑 | | | | |
| | ⑩ 大曲薬師堂 | | | | |

- ①-1 荒神社奥小祠群
- ①-2 川附虚空藏堂 (川附辻堂)
- ①-3 和牛いでみつの墓
- ①-4 多田観音様
- ①-5 宝篋印塔
- ① 石籠神社
- ① 銅の観音堂
- ①-1 地藏様と牛供養碑
- ①-2 井原西国三十三観音霊場十一番観音堂
- ① 丑寅(長)神社
- ① 高平の大仙様
- ① 旧山陽道 橋中大橋跡の碑
- ① 大師堂
- ① 墓の神

七日市編

- | | | | | |
|---|--|--|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 井領堂 (大師堂) ② 武速神社 ②-1 恵美寿神社 ②-2 荒神社 ②-3 水神社 ②-4 地神碑 ②-5 茅輪神社 ②-6 總社稲荷神社 ②-7 蔵書神社 | <ul style="list-style-type: none"> ②-8 菅原神社 (天神社) ②-9 倉神様 ②-10 玉山稲荷神社 ②-11 下山神社・黒丸神社 ②-12 歪状穴のある武速神社の手水鉢 ②-13 袋静の句碑 ②-14 武速神社のむくの木 ③ 天王山大師院 ③-1 鎮守堂 | <ul style="list-style-type: none"> ③-2 井原西国三十三観音霊場十八番観音堂 ④ 七日市本陣跡の碑 ⑤ 七日市停車場の石柱 ⑥-1 七日市駅跡 ⑥ 伊達大蔵屋敷跡 ⑦ 笠岡注米、笠岡小路・井原小路 ⑧ 井原堤の桜 ⑨ 日方橋の架橋 ⑩ 朗重・芳部・響軒・諫山遺蹟北五丁の石柱 | <ul style="list-style-type: none"> ⑪ 井原西国三十三観音霊場十九番観音堂 ⑫ 火御崎神社 ⑬ 七日市駅 川越し上がり場跡 ⑭ 常夜燈 ⑮ 佐藤津留碑 ⑯ 花山跡 ⑰ 岡ノ堂荒神社 ⑱ 井原西国三十三観音霊場二十番観音堂 ⑲ 法界碑 | <ul style="list-style-type: none"> ⑳ 牛供養碑 ㉑ 石籠神社贈元老顧問藤代源治碑 ㉒ 稲荷神社 ㉓ 木野山神社 (神樂山) ㉔ 石籠神社 日之出講御神体 ㉕ 木野山神社 (花野) ㉖ 花野池 |
|---|--|--|--|--|



上出部編

- | | | | |
|---|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 正一位玉山稲荷神社 ② 鎌田城跡 ③ 寺子屋を開いた安井権頭・安井大賢の墓 ④ 養茶庵石碑 (光明真言塔) ⑤ 正一位玉産稲荷神社 ⑥ 岩山神社 (岩山宮) ⑥-1 飯崎神社 ⑥-2 地神碑 ⑥-3 三寶帝神社 | <ul style="list-style-type: none"> (元高社) ⑥-4 妙見神社 ⑥-5 恵美寿神社 (竜王様) ⑥-7 金毘羅神社 ⑥-8 十二神社 ⑥-9 日露戦争戦勝記念碑 ⑥-10 岩山神社常夜燈 ⑥-11 道しるべ ⑥-12 勸業盤 ⑥-13 飯旅所の休み石 ⑥-14 飯手洗井筒 | <ul style="list-style-type: none"> ⑦-1 上出駅跡 ⑦-2 いづへの石柱 (道しるべ) ⑦-3 井笠鉄道廃線跡・根木附近 ⑧ 井原西国三十三観音霊場十六番観音堂 ⑧ 井原西国三十三観音霊場十五番観音堂 ⑩ 原地蔵堂 ⑪ 恵美寿神社 上町・中町・下町・後納場 ⑫ 天神社 (菅原神社) | <ul style="list-style-type: none"> ⑬ 九省池 (こぶつ池) 跡 ⑬-1 古井の川 ⑬-2 鯉の川 (堂柱) 井筒 ⑬-3 鹿木戸井筒 ⑬-4 軍の森井筒 ⑬-5 川上井戸 (根木井筒) ⑬-6 昭和井戸 ⑬ 杉ノ木三寶荒神社 ⑬ 「水越」の庚申橋 |
|---|---|---|--|

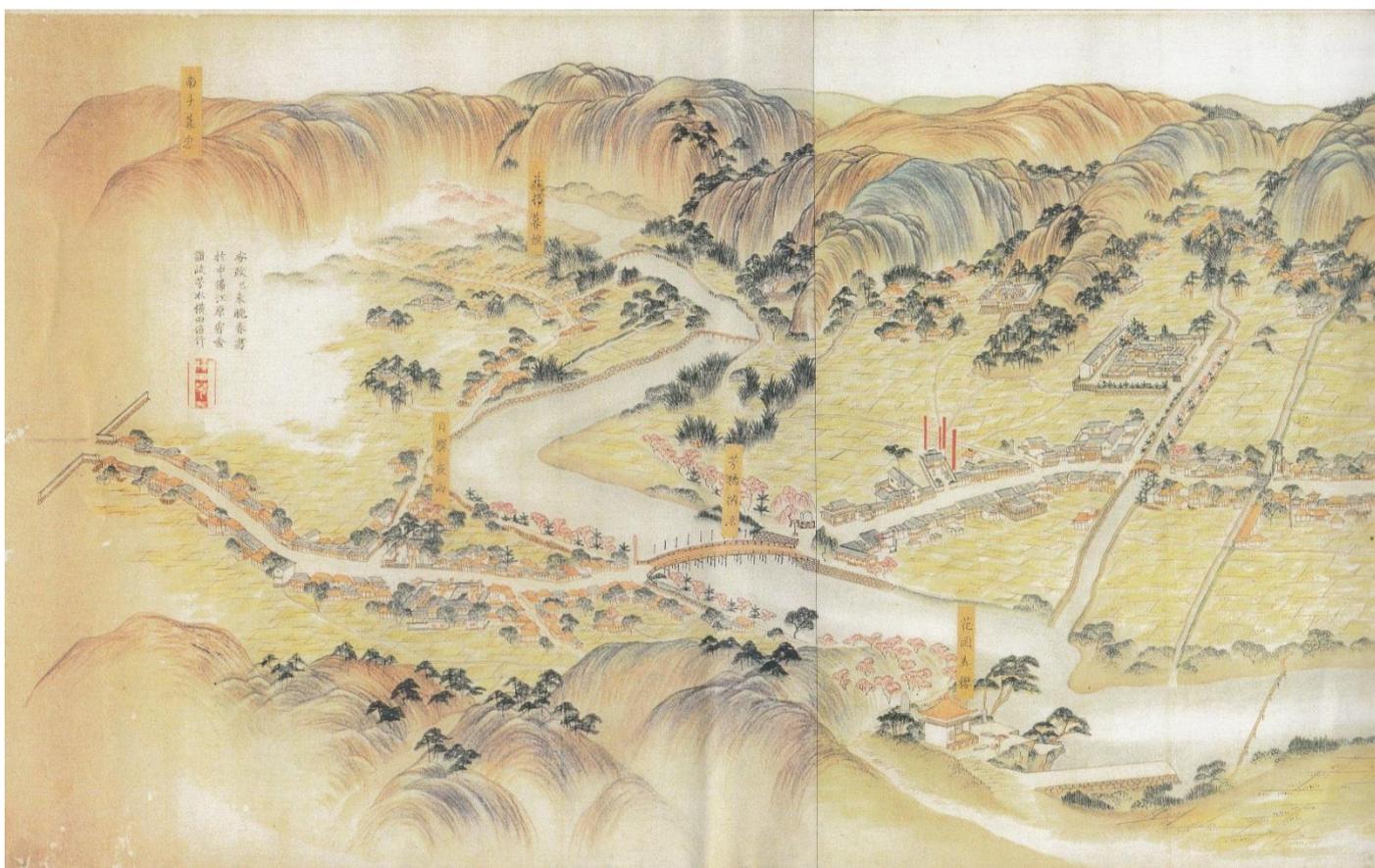
古墳編

- | | | |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 狸原1号墳 ② 狸原2号墳 ③ 無量寺1号墳 ④ 無量寺2号墳 ⑤ 山間1号墳 ⑥ 山間2号墳 ⑦ 後山古墳 ⑧ 地藏平古墳 ⑨ 東大谷1号墳 ⑩ 東大谷2号墳 | <ul style="list-style-type: none"> ⑪ 草足塚西遺跡 ⑫ 草足塚東遺跡 ⑬ 権現平西遺跡 ⑭ 権現平1号墳 ⑮ 権現平2号墳 ⑯ 飯山東平古墳 ⑰ 飯山古墳 | <ul style="list-style-type: none"> ⑱ 笹谷1号墳 ⑲ 笹谷2号墳 ⑲ 刈山1号墳 ⑲ 刈山2号墳 ⑲ 狐谷1号墳 ⑲ 狐谷2号墳 ⑲ 狐谷3号墳 ⑲ 関東平古墳 (石塔山古墳) ⑲ 岩崎山1号墳 ⑲ 岩崎山2号墳 ⑲ 岩崎山3号墳 ⑲ 岩崎山4号墳 ⑲ 岩崎山5号墳 ⑲ 岩崎山6号墳 ⑲ 岩崎山7号墳 |
|---|--|--|

七日市編

七日市は、上出部村に属していたが、江戸時代ここに置かれた山陽道の宿場・七日市宿は、交通の難所・川越え渡し場もあり、西の神辺宿・高屋宿、東の今市宿（西江原町）・矢掛宿に通じる交通の要衝であり、伝馬人足 25 人・馬 25 頭が常備され、大名の参勤交代や一般旅人の休泊所として発展した（詳細は、わがまち出部 P 37～43 参照）。元禄郷帳（1688～1704）によると「枝村七日市村の家数 127、男 254・女 242、牛 25・馬 10」と記され、また文政郷帳（1818～1830）には、枝村七日市村の石高 535 石余と記されており、新たに枝村として独立した七日市村は人口・石高共に上出部村とほぼ同等であったことがわかる（上出部編 P 19 参照）。

また、下記の備中江原八景絵図（安政 6 年〈1859〉横田芳水画・井原市立図書館蔵）を見ると七日市宿から、安政 4 年（1857）完成の日芳橋を渡り、西江原に通じる山陽道の町並みがよくわかる。（右上の神戸川上流の大きな屋敷が、一橋江原代官所・その左上が興讓館・神戸川と芳井川〈現小田川〉の合流地点の下にあるのが観光名所 花山である）



いろいろ
① **井領堂(大師堂)** (間口 195 cm・奥行 197 cm)

井領堂は、旧山陽道沿いの七日市町西の字井領（現アクティブライフ井原東側）に建てられた辻堂で、写真右側に「南無阿弥陀佛」と彫られた名号碑に「宝曆十一年（1761）^{ほうれき}己^{つちのと}天三月吉日 施主 藤代幸左衛門」と刻されており、江戸時代の中頃には建立されていたことがわかる。

当時の井領堂は田の脇の寂しい所で、夜には



「スネコスリ」という犬の形をした化け物が出て、通行人のすねをこすると、とたんに通行人は歩けなくなったという言い伝えが残されている。

岸加四郎氏（井原の辻堂著者）によると、江戸時代の辻堂は信仰の場というより旅人の休憩所であり地区民の集会所の意味合いが強かった。小さな石仏は旅の安全祈願のため地元民がお堂のそばに祀っていた。しかし明治以降、交通の発達に伴い辻堂は休憩所の機能を失い、代わって堂内に仏像を祀る信仰の場に転化していったという。

現在の井領堂は、大正 6（1917）年 3 月に齋藤金太郎氏により再建されたことが左端の「南無大師遍照金剛」と彫られた宝号碑に記さ



せんざ
遷座された。

武速神社の御祭神は、やまたのおろち退治で有名な素盞鳴尊すさのおのみこと、その妻稲田姫命いなだひめのみこと、その子八王子やつはしらのみこがみ（八柱御子神）の三柱である。素盞鳴尊は、仏教の守護神牛頭天王ごずの生まれ変わりとされ、古くは「祇園牛頭天王宮ぎおん」と呼ばれ、今でも「天王様てんのう」と呼ばれているのはその名残である。神社名は江戸中期「祇園社へんがく」（扁額有り）と改称、その後、明治 3（1870）年古事記にある「武速たけはや素盞鳴尊すさのおのみこと」にちなみ、現在の「武速神社」に改称



れている。堂内の奥板壁の中央に井領堂と刻されたお大師様の石仏（高さ 58 cm・幅 27 cm）が安置され、その両脇に古いお大師様（4 体）と牛供養万人講碑（1 基）が安置されている。

② たけはや 武速神社

武速神社は、平安時代の長保 3（1001）年この地方に悪疫（伝染病）が流行した際、神輿山みこし（現在の木野山神社のあるところ）に創建され、南北朝時代の永徳 2（1382）年現在地に



された。

当神社は、江戸時代、一橋家の祈願所として尊崇され、代官は毎年年頭に当社に参詣し領内安全を祈るのが慣例となっていた。そして社殿の再建てんぼう（天保 15〈1844〉年）、修築かえい（嘉永 2〈1849〉年）も一橋家の合力（資金援助）で行われてい

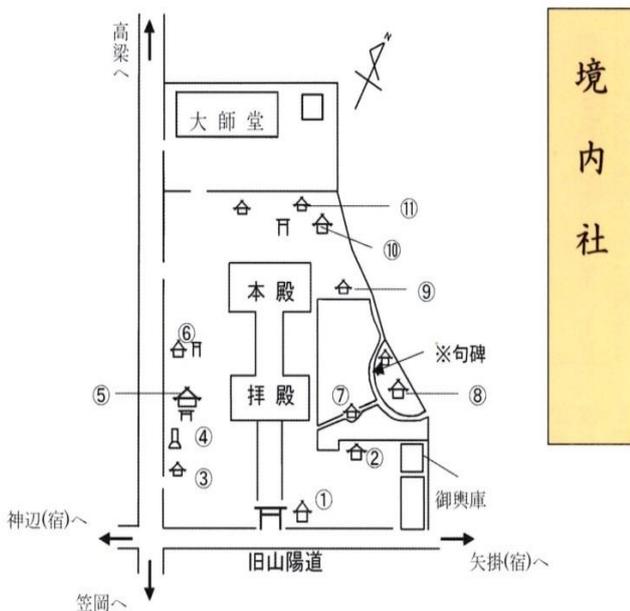
た。最近では、昭和 62 (1987) 年氏子の尽力に



より、屋根や廊下の柱など建物の主要部分が修復され現在に至っている。

夏祭りは昔、旧暦 6 月 7 日に行われ多くの出店で賑わった。その後 7 の日に市が立つようになり七日市の地名が生まれたと言われている。現在は、7 月第 4 日曜日で七日市町、上出部町の氏子が参加している。秋祭りは旧暦 11 月 4 日とその前日に行われていたが、現在は 11 月第 1 日曜日とその前日に行われ七日市町の氏子が参加している。昔は 3 台の神輿と千歳楽で賑わっていたが、現在夏祭りは消防団が、秋祭りは少年団が神輿を担ぎ区内を回り、夜は夏祭り・秋祭り共に備中神楽を奉納しお祭りムードを盛り上げている。

◎武速神社境内社など



境内社

②-1 恵美寿神社

(間口 71 cm・奥行 106 cm
・高さ 183 cm)

大鳥居右横にあり事代ことしろ主命ぬしのみことを祀る商売繁盛の神様。



②-2 荒神社

(間口 57 cm・奥行 83 cm
・高さ 137 cm)

神泉しんせんの南側にあり、素戔鳴尊すさなみを祀っている。病気や災難から産子うぶこを守る神様。



②-3 水神社

(間口 32 cm・奥行 55 cm
・高さ 90 cm)

大鳥居左横にあり、罔象神みづはのかみ(水をつかさどる神様)を祀っている。



②-4 地神碑

茅輪神社前の石の台座の上に「氏子中、大正三(1914)年十一月建立」と刻字された五角柱(高さ 77 cm)の地神が祀られている。五角柱

のそれぞれの面には、天照大神あまてらすおおみかみ(五穀豊熟祈心おおなむちのみこと)、大己貴命すくなひこなのみこと、少彦名命はにやすのみかみ、埴安神うかのみたまのみこと、倉稻魂命うかのみたまのみことの 5 柱の農耕神の名前が刻まれている。

昔は春と秋の社日しゃにち(春分・秋分の日)には、地神の祭りが行われた。農民は農作業を休み、地神にしめ縄を掛け、お供物をし、豊作と地域の安全を祈った。



②-5 茅輪神社 (間口 168 cm・奥行 240 cm)



武速神社拝殿の西側に、茅輪くぐりで有名な蘇民将来をお祀りした茅輪神社がある。創建は武速神社と同時期といわれている。現在の建物は昭和 26(1951)年修復、屋根は昭和 62(1987)年葺き替えられた。社伝によると、素盞鳴尊が武塔天王と名前を変えて旅をされていた時、暴風雨に逢い、まず、お金持ちの巨旦将来に一夜の宿を頼まれたところ冷たく断られた。次に、貧しい生活を送っていた兄の蘇民将来に宿を頼むと、蘇民将来は温かく家に迎え、粟がゆを作って親切にもてなした。尊は大変喜び「茅の輪を作って腰に付け蘇民将来の子孫と言え、そうすれば子孫に至るまで災厄から守ってあげよう」と告げて旅立った。この出来事以来、蘇民将来の家は大いに栄え、巨旦将来の家はすべてのことが裏目に出で、生活にも困るようになったという。



この言い伝えを元

に、親切な蘇民将来をお祀りしたのが茅輪神社で、現在も7月第4日曜日（武速神社夏季大祭）の夕方、鳥居に取り付けられた茅の輪を参拝者が8の字形に8回くぐると病気や災厄にかからないと言われ



ている。また神社でいただく小型の茅の輪を玄関につると、その家に不幸な出来事がないと言われている。

②-6 総社稲荷神社

(間口 58 cm ・ 奥行 90 cm
・ 高さ 144 cm)

茅輪神社の北側にあるのが総社稲荷神社である。

宇迦之御魂神を祀っている。元は食物・特に稲の豊作をつかさどる稲荷神であるが、今では商売繁盛の神様。



②-7 巖島神社

(間口 36 cm ・ 奥行 56 cm
・ 高さ 90 cm)

拝殿東の神橋の途中の南側にあり、市杵島姫命を祀っている。市を守る神様。



②-8 菅原神社 (天神社)

(間口 52 cm ・ 奥行 89 cm
・ 高さ 31 cm)

菅原道真公を祀る学問・受験必勝の神様。



②-9 瘡神様

(間口 26 cm ・ 奥行 17 cm
・ 高さ 31 cm)

神泉の北側にあり少彦名神を祀り、本来、医薬の神だが、吹き出物を治す神として信仰されている。



②-10 王山稲荷神社

(間口 67 cm ・ 奥行 116 cm
・ 高さ 193 cm)

本殿北東にあり、御祭神



は、^{うかのみたまのかみ}宇迦之御魂神で、元脇本陣・藤代家(天王屋)の屋敷神だが、ここに遷座された。願い事がよくかなうと、願掛けする人が多い。

②-11 下山神社・黒丸神社

(間口 52 cm・奥行 84 cm
・高さ 133 cm)

王山稲荷神社の左横にあり、前社は宇迦之御魂神。後社は^{おおくにぬしのみこと}大己貴命で^{おおくにぬしのみこと}大己貴命、大黒様ともいわれ、富をもたらす神様。



②-12 ^{はいじょうけつ}盃状穴のある^{ちようずばち}武速神社の手水鉢

(長さ 100 cm・幅 70 cm・高さ 40 cm)

武速神社境内の茅輪神社前に江戸時代^{しょうとく}正徳3(1713)年に造



られた古い手水鉢(内側に製造年が記入)がある。その石の^{ふち}縁には、たくさんの盃状穴が彫られている。これは^{ひやくどまいり}百度参り以前に願い事が叶うようにと、参拝者が彫ったものではないかと言われている。

拝殿左手に百度参りの回数を数えるのに使われる百度石があり上部に20のリングが付いている。(明治37<1904>年願主安井品太郎)



②-13 ^{たいせい}岱静の句碑

(高さ 160 cm・幅 65 cm)

「^{はな}華の^か香の下へ流れて登り^{あゆ}鮎」と刻された岱静の句碑は、江戸時代末期に花山に建立されていたが、明治22(1889)年旧井原・笠岡道の開通に伴



い武速神社境内の^{てんじんやま}天神山(築山)の一角に移転された。(詳細は、⑩花山跡の項参照)

境内には、ほかにも江戸時代に寄進されたとされる灯ろうや手水石がある。

②-14 武速神社のむくの木

天保15(1844)

年再建前の祇園牛頭天王宮と称していた頃の絵図にむくの木が載っており、樹齢200年以上の貴重な古木である。



③ 天王山大師院 (間口 7.7m・奥行 4.7m)



武速神社の北にある大師院は、江戸時代の文化10(1813)年に、^{かねこぼう}金庫坊(現在金敷寺に統合)住職により、^{いんきよでら}金庫坊の隠居寺として建立され、大師坊と称していた。文政年間(1818~1830)に流行病がまん延した時には、薬師如来を祀り^{へいゆ}平癒祈願をした。文政10(1827)年村民の寄進により鑄造された梵鐘(高さ60cm・直径50cm・重さ50kg)は、長年村民たちに親しまれたが昭和17(1942)年11月25日に第2次世界大戦の武器となるために供出された。

一時無住の時もあったが、昭和7(1932)年から32(1957)年までは^{しんじょう}佐藤真定住職が常住し、真言宗大覚寺派の儀式や行事を行い教義を広めていた。昭和27(1952)年宗教法人「大師院」と改名された。

本堂の正面には、中央に本尊^{りゅうぞう}薬師如来立像

(高さ 70 cm・幅 30 cm)、向かって左手に阿弥陀如来立像(高さ 55 cm・幅 10 cm)、右手に脇仏



千手観世音菩薩立像(高さ 65 cm・幅 23 cm)、右端に宗祖弘法大師座像(高さ 29 cm・幅 27 cm)が安置されている。左端には、戦病没死者之英魂位(高さ 70 cm・幅 30 cm)、物故者精霊位(高さ 67 cm・幅 22 cm)の位牌が祀られている。

本堂は、昭和初期改築されたが老朽化したため、昭和 58 (1983) 年再建に着手し、昭和 59 (1984) 年 3 月完成、同年 6 月金鳴寺、金敷寺、高山寺、法輝寺の住職により落慶法要が営まれた。

その後、僧侶の資格を得た三宅寶園氏(ほうえん)が堂守りとして平成元(1989)年から平成 26 (2014) 年まで勤められたがその後閉鎖されている。

本堂前には「奉為弘法大師千四百年御遠忌供養塔(高さ 3m・幅 19 cm)」が昭和 9 (1934) 年 3 月建立されている。

◎天王山大師院境内の仏堂など

③-1 鎮守堂(ちんじゅどう) (間口 1.9m・奥行 2m)

本堂東側の鎮守堂は、本堂の仏様をお守りするために設けられたお堂で中に毘沙門天立像(高さ 46 cm・幅 18 cm・木像彩色)が安置されている。



③-2 井原西国三十三観音霊場十八番観音堂

(本尊 六角堂〈京都〉如意輪観音

間口 83 cm・奥行 114 cm・高さ 240 cm)

鎮守堂のすぐ近く南東側に観音堂があり、台座(高さ 34 cm)に「きょうと 十八番 六角堂」

と刻され(現在は賽銭箱の台になっている)その後ろに如意輪観世音菩薩の石像(高さ 76 cm・幅 36 cm)が安置されている。



そして、観音堂の南に千手観音菩薩の石像(高さ 45 cm・幅 26 cm)や観音経百萬遍の石碑(高さ 120 cm・幅 22 cm)

「大正四年乙卯正月建・施主當所齋藤治良作」、地藏立像(石像、高さ 83 cm・幅 25 cm・台座 67 cm)「享保十四己酉(1729)年」、古い宝篋印塔(高さ 170 cm)、念佛一百万遍の石碑(高さ 120 cm・幅 21 cm)、「宝暦六丙子(1756)年十二月吉祥日」などがある。



④ 七日市本陣跡の碑(高さ 174 cm・幅 116 cm)

江戸時代七日市宿は大坂(現大阪)から小倉を結ぶ山陽道の宿駅の一つであった。七日市宿には大名・公家・幕府役人が休泊する本陣(1軒)と本陣がふさがっている時に休泊する脇本陣



(3軒)があった。また一般庶民の泊まる旅籠屋が80軒あまりあった。

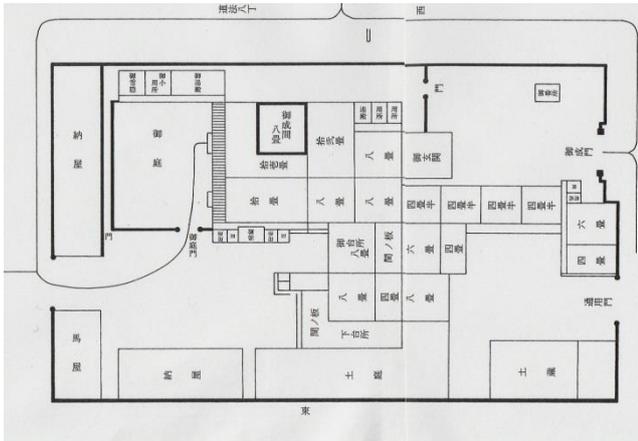
七日市本陣は図のように立派な構えになっており、



七日市宿の平面図

大名の泊まる御成間は、他より一段高くなっていた。

現在、「旧山陽道参勤交代七日市宿場本陣屋敷跡地 昭和六十一年秋 勲五等叙勲記念川相武夫建之」の碑が建立されている。



◎井笠轻便鉄道のなごり

⑤ 七日市停車場の石柱 (高さ 70 cm・幅 23 cm)

大正 2 (1913) 年 11 月、井笠轻便鉄道 (後に井笠鉄道と改称) の開通を記念して建てられた案内石柱で、「従是通路三十六間 寄附者 齋藤金太郎」と刻され、これより 36 間 (約 65m) 先が七日市停車場であることを示している。



⑤-1 七日市駅跡

七日市駅には貨物の引込線もあり、人や貨物を運ぶ拠点駅として重要な役割を果たしていた。しかし道路の整備とバス・トラックの発達で鉄道利用が減少し、昭和 46 (1971) 年運行を取りやめ



七日市駅舎 昭和46年3月31日廃止



井笠鉄道 59 年の歴史に幕を閉じた。現在、鉄道線路跡は県道になっている。

⑥ 伊達大蔵屋敷跡

(東西約 160m・南北約 120m)

旧七日市駅前付近が、中世戸木荒神山城主 伊達大蔵の屋敷跡で、その概略が小字図 (明治 22 (1889)



年) に明確に残されている。これを見ると城主の館は広大で周囲を西堀・南堀・東堀で囲まれていたことが分かる。

現在、西堀の端の曲線部分が畦道として残されている。

⑦ 笠岡往来、笠岡小路・井原小路

江戸時代、笠岡・井原・成羽を結ぶ笠岡往来は、山陽道に次ぐ人や物資の輸送の重要な道路であった。中でも、山陽道から割烹一久の東側を南に抜け天王坂を越えて花野へ通じる道を笠岡小路、武速神社西側の道を北へ進み井原方面へ通じる道を井原小路と言い、いずれも笠岡往来の一部であった。



⑧ 井原堤の桜

日芳橋付近まで続く小田川堤防の桜並木は、井原の桜として、昭和 10 (1935) 年には、山陽新報 (現山陽新聞) から「岡山県十勝地」の 1 つに選ば



れるほど有名であった。(郷社・足次山神社鳥居横にその記念碑が建っている)しかし、現在これをいつ誰が植えたか、そのルーツを知る人は少ない。

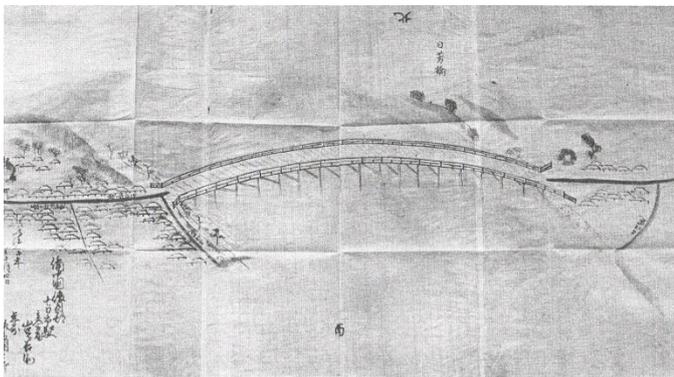
実は、上出部町出身の当時の井原町長、原田吉平きちへいが郷社の境内に桜の苗木を植え、それを大正3(1914)年小田川堤に移植して、町の観光に寄与しようとしたのが始まりである。その後、春の訪れとともに多くの観光客が花見に来るようになり、昭和35(1960)年井原商盛會しょうせいかい(現井原商工会議所)は、彼の業績を称え感謝状を贈っている。



⑨ 日芳橋の架橋

七日市宿と西江原村西新町の間を流れる芳井川(現小田川)には江戸幕府が架橋を許さなかったため、当時の人は大変困っていた。

ところが幕末に来た一橋江原代官所の代官、友山勝次は、架橋により物資や人々の交流をはかり、この地方の産業を発展させたいと考えた。



備中日芳橋絵図

そこで幕府の許可を得て川の両岸に石を積み堤を直し、約3ヶ月かけて木の橋(幅約3.6m、長さ60m)を完成させた(現在の橋より少し下流)。時は安政4年(1857)11月7日、七日市と芳井川から一字ずつ取って、日芳橋と名付けられた。渡橋式にあわせて、祝賀には能や狂言などの催しもあり、非常に多くの見物客でにぎわったという。

日芳橋架橋の経緯は、翌年、阪谷朗盧さかたにろうろ(初代興讓館館長)が、安政5つちのえ戊午うま(1858)年4月、日芳橋碑(高さ117cm・幅58cm)に記し、その石碑は今も西江原側の川岸に残っている。



その後、明治・大正時代に2回ほど木橋が架け替えられたが、大正9(1920)年、小田川の洪水で流失し、大正15(1926)年に鉄橋の日芳橋が完成した。橋の両端に「日芳橋・ひよしはし」と刻した街灯が灯り、昭和57(1982)年1月には南側に歩道橋が設けられた。

日芳橋は、岡山県下にある大正期の鋼鉄橋としては、岡山市の京橋と同橋の2例しかなく、現存する県内最古のトラス橋(鋼材と鋼材を三角形に結合して組み立てた橋)である。全国的にも初期のトラス構造の橋として注目され、鋼ボウストリングトラス(曲弦、下路)橋として「日本の近代土木遺産」に登録されている。



⑩ 朗盧・芳郎・警軒・諫山遺蹟北五丁の石柱

(高さ130cm・幅25cm)

この石柱は、日芳橋西の南脇にある。後月教育会が、後月の著名人の生い立ちや業績をまとめた「後月の人々」の冊子



を発売し、併せてそれらの著名人の石柱16本を建て顕彰したものである。石柱の裏面に昭和18(1943)年後月教育会とあることから、これはその中の1つであることが分かる。北五丁(約500m)は興讓館^{ぎょうとく}仰徳園までの距離を表している。朗盧は阪谷朗盧(興讓館の創始者初代館長)、芳郎は阪谷芳郎(朗盧の四男、大蔵大臣・東京市長・貴族院議員)、警軒は阪田警軒(興讓館二代館長)、諫山は奥田諫山(阪田警軒の後、留守教授として興讓館の運営指導にあたる)、阪谷芳郎以外は興讓館仰徳園に頌徳碑がある。

⑪ 井原西国三十三観音霊場十九番 観音堂

(本尊 革堂〈京都〉千手観音、間口210cm・幅120cm・高さ250cm)

日芳橋下のブロック建て観音堂の中、向かって右側には台座(高さ34cm)の上に千手観世音菩薩の石像(高さ70cm・幅35cm)が安置され、下に「京都十九番かう堂」の記載があり、ここが井原西国三十三観



音霊場十九番札所となっていることが分かる。中央にも、古い千手観世音菩薩らしい石像(高さ76cm・幅50cm)が安置されている。左側の石塔は、弘法大師像の下に「奉納大乘^{ほうのうだいじょうみょうてん}妙典日本^{かいこく}廻国」とあることから「大乘妙典」を全国六十六カ所の霊場に1部ずつ奉納し終えた行脚僧(六十六部)が満願記念に奉納した廻国供養塔(高さ130cm・幅25cm)である(宝暦11(1761)年2月吉祥日 願主當村郎心)。その東側に万人講碑が3基(高さ46cm・57cm・67cm・幅各々26cm)が並んでいる。

⑫ ^{ひのみさき}火御崎神社

(間口56cm・奥行90cm・高さ140cm)

日芳橋から約50m下流の堤防上に、火御崎神社と称する小祠^{しょうし}が祀られている。



そのいわれは明治8(1875)年宿場町七日市で火災が起き、中心部のほとんどが焼失する大惨事になった。ところが、火事はこの小祠の付近でピタリとおさまった。住民はこれに畏敬の念をいだき、ここに火産靈神^{ほむすびのかみ}を御祭神とする火御崎神社を建立した。現在は3月第4日曜日に大祭が行われ、子供相撲が奉納されている。

⑬ 七日市駅 ^{かわご あ}川越し上がり場跡

(高さ113cm・幅135cm)



七日市宿の東を流れる芳井川(現小田川)には渡し場があり、兩岸の水のないところは石畳が敷いてあった。旅人は人足の肩車^{れんだい}や連台という欄干^{らんかん}の付いた台に乗せてもらって川を渡っていた。後者を「台渡し」と呼んでいた。

しかし、大水の際には「川止め」といって通行が許されず、旅人は何日も足止めを余儀なくされていた。

現在、川越し上がり場跡には平成元(1989)年12月、岡山県により記念碑が建立されている。

⑭ **常夜燈** (高さ 2m)

川越し上がり場跡の横に古い常夜燈が建っている。江戸後期の天保3(1832)年に建てられたもので、この付近の夜道を照らす街燈の役割をしていた。竿の部分にこんびらだいごんげん金毘羅大権現・あまてらすすめ天照皇おおみかみのみや大神宮・きびつのみや吉備津宮等の



文字が刻まれているが、さんけい参詣のための道しるべと、これらの神々の信仰と両面があると言われている。

⑮ **佐藤津留碑**

(高さ 180 cm・幅 83 cm)

七日市町の日芳橋手前の道を 100mほど南下した道路の右手に「孝津公園」がある。これは、母に孝養をつくした孝女津留にちなみ名づけられたものである。



佐藤津留碑(法学博士だんしゃく男爵 阪谷芳郎題額)には、興讓館長 山下たかし崇しゅうどう(秋堂)の次のような碑文が刻まれている。

孝女佐藤津留は、弘化2(1845)年七日市に生まれた。幼い頃父を亡くし、母と姉と3人で暮らしていた。母と姉は病弱なため、津留は7歳の時から姉を励まし、母の看病に尽くした。近所から食べ物をいただくと、津留はまず母にささげ、次に姉にすすめ、残りがあれば自分が食べていた。津留の手厚い看病のお陰で母の病気も少し良くなったので、姉は近くの村へお嫁に行った。その後は田畑を耕し、一人で養っていた。晴れた日には、前のはふご(わらで作ったかご)に母を乗せ、後ろのはふごには農具を乗せ、天秤棒で担いで田畑に行き、田のあぜの木

陰に母をおろし、時々会話して母の心を慰めながら田を耕した。夜は母の枕元にすわり背中をなでたり、肩をもんだりした。母が眠った後は、静かに糸車を回し、夜遅くまで糸をつむいで家計を支えた。津留が年頃になった時、周囲の人々が養子を迎えるよう勧めたが、母の孝養が思うようにできないと断った。

明治18(1885)年1月、岡山県令(今の県知事)は、津留の孝心をたたえ、褒賞金を贈り表彰した。

明治23(1890)年6月、母の病気が重くなり、津留は十日余り、ほとんど寝ないで看病した。母は多年の孝養に感謝しながら78歳でなくなった。

明治24(1891)年津留の孝心の素晴らしさがついに宮中にまで知られ、りよくじゅほうしゅう緑綬褒章(親孝行など特に優れた人に与えられる賞)を賜った。そして、時の文部大臣、井上毅は、津留の孝養に痛く感激し、彼の文章が女学校の教科書に掲載されると、その孝養は全国に知れわたった。

大正4(1915)年津留の家が火事(類焼)にあったので、地域の人々がお金を出し合って、津留のために家を建てた。津留の老後の生活は苦しかったので後月郡長と井原高等女学校長が、前後2回全国の女学校にカンパを呼び掛けたところ千百円余り集まった。津留は心から感謝しながら大正15(1926)年3月11日、82歳でなくなった。(以上碑文の概要)



昭和5(1930)年1月、地元の有志の人たちは、津留の孝心を永く後世に残すため自然石の基壇(高さ210cm)の上に佐藤津留碑を建立した。

①⑥ はなやま
花山跡



この花山の絵図は七日市から花野へ抜ける三差路の北側あたりである。江戸時代に一橋代官友山勝次は 1820～30 年頃、七日市町東部の花野に桜・梅・桃・すもも・やなぎなどの花木を植え、川岸に亭を建て花山と称する庶民の観光地をつくった。

芳井川（現小田川）の清き流れは、花山のふもとを流れ、春は咲き誇る花々、夏は清流に踊る鮎、秋は高月山に昇る名月、冬は落石の峰にかかる松の雪、と四季を通して眺めがよく年中遊びに来る人が絶えなかったという。

亭の上手の句碑は、当時、勝次の弟で俳人の岱静が、花山のよさを「華の香の下へ流れて登り鮎」という句を詠み、これを河合紅雲ら門弟たちが、安政 5（1858）年に建立したものである。この句碑は現在、武速神社境内に移された。

また亭の下手には猿尾さるおが描かれている。猿尾とは、湾曲した川の堤防の保護のために、猿のしっぽのように川の流れに対して斜めに突き出した石塁のことであるが、これは高瀬舟が荷物を積み降ろしする船着き場にもなっていた。

①⑦ おかんどう
岡ノ堂荒神社

（間口 124 cm・奥行 190 cm・高さ 260 cm）

七日市町南方の山麓、字岡ノ堂に荒神社があり、御祭神は素盞鳴尊すさのおのみこと。人々は「おかんどうの荒神様」と呼んでいる。

七年ごとの式年祭には、この神社から御祭神

を武速神社内にある荒神社にお迎えし、式年神楽を盛大に奉納している。

氏子は産れて七歳になるまでは、荒神様の産子うぶことされ、子供が産まれると、百日ももかにこの神社と境内にある荒神社に宮参りし

（江戸時代には神社が氏子になったことを証明する氏子札を渡していた）、その後も親と一緒に参拝し健やかな成長をお祈りする慣わしになっている。

この神社の創建年代は不詳だが、現在の建物は昭和 33(1958)年修復造営し、平成 17(2005)年再度修復されている。



①⑧ 井原西国三十三観音霊場第 20 番観音堂

（本尊 善峯寺よしみねでら〈京都〉千手観音、間口 120 cm・奥行 120 cm・高さ 180 cm・ブロック造り）

七日市町南部、昔の笠岡小路を南に進むと、天王坂登り口の西側、無量寺の一角に善峯寺がある。二十番と刻された台座（高さ 38 cm）の上に千手観世音菩薩（高さ 75 cm・幅 35 cm）が安置されている。



①⑨ 法界碑 （高さ 120 cm・幅 80 cm）

七日市町南部、昔の笠岡小路添いの分かれ道に「南無阿弥陀佛法界」と書かれた法界碑がある。このような法界碑は分かれ道、村境、寺院の入り口や境内でよく見られる。



「法界」とは、宇宙に存在するすべての世界を表し、法界碑を建てることによって、この石にこの世のすべての霊を宿らせ、その成仏を祈ることで有縁無縁のあらゆる霊を供養しようというものである。その脇には小さなお地蔵様（高さ 34 cm・幅 22 cm）も安置されている。

⑳ **牛供養碑**（高さ 40 cm・幅 23 cm）

法界碑の脇にもう 1 つ、お地蔵様の下に牛を浮き彫りにし、その下に万人講と彫られた小さな石碑がある。これは死んだ牛の供養碑である。



昔、牛は農民の大切な労働力、この牛が死ぬと万人講まんにんこうが開かれ、世話人たちが近くの村々をまわって寄付を募り、集まったお金で供養碑を建て、余ったお金を補助金として牛を亡くした家に渡していた。万人講は牛供養と共に相互扶助の役割も果たしていたので万人講碑ともいわれる。供養碑の下に右作道、左笠岡と書かれており、牛供養碑は道しるべも兼ねていたことがわかる。碑の側面に「大正九年（1920）七月二十日・川本庫太郎かわもとくらたろう」と建立年と施主名が刻されている。

㉑ **石鎚神社 贈元老顧問 藤代源治碑**

（高さ 190 cm・幅 100 cm）

七日市町無量寺に表記の碑が建てられ、裏面に「昭和 32（1957）年 5 月吉日建之 出部日之出講社中 元陸軍法務中将従三位勲 1 等大山文雄書」とあり、当時の井原市長に揮毫を依頼したことがわかる。



藤代源治（七日市町、昭和 22（1947）年 4 月 22 日没・行年 73 歳）は、四国石鎚神社の信仰

団体・出部日之出講の熱心な信者であり、同講の先達、支部長として活躍する一方、大正元（1912）年、石鎚神社維持資金多額寄進者 100 人に特別絵符（黒絵符）が与えられたが、彼はその 2 3 号をいただいた。また、石鎚神社の夏山参拝では請われて成就社（中宮社）に詰め登山課長として采配もふるった。

このような彼の偉大な業績を称え、没後 10 年目に後月郡内の同講社員に寄付を呼びかけ、この碑が建立されたのである。

㉒ **稻荷神社**

（間口 55 cm・奥行 73 cm・高さ 130 cm）

藤代源治碑の東側に豊国とよくに稻荷の分霊をお祀りした稻荷神社がある。



講社は花野を中心に 15 戸でかつては 1 月 20 日頃、大門から宮司が各家をまわり夜祈祷を行っていたが、宮司の高齢化に伴い、現在は行われていない。

㉓ **木野山神社（神輿山）**

（間口 4m・奥行 3.2m）



木野山神社は、七日市町南の神輿山山頂に祭られている。そのわけは、明治 12（1879）年ごろ岡山県下一帯に伝染病のコレラが大流行し、多数の死者が出た。この地方にも感染者が出たため、伝染病などに霊験あらたかな高梁市の木野山神社から、この地に分祀されたのである。

御祭神は、山と農業、航海
を守る大山祇神 おおやまづみのかみ である
が、使いの神である おおかみ 狼 が



コレラ菌を食い殺すと広く信じられていた。そのため神社の後ろ側には狼の出入りする小さな口が設けられている。

お祭りは、4月第4日曜日に春季大祭、9月第3日曜日に秋季大祭を行い、無病息災や心願成就などをお祈りする。境内では子供相撲が行われるが、これは子供たちの元気のいい姿を神様に喜んでいただき、子供たちは神様から健康で丈夫に育つよう祝福されるという意味を持っている。

建物は昭和6(1931)年修復造営され、さらに平成17(2005)年再び修復されている。

②④ 石鎚神社 日之出講御神体

(高さ約7m・幅約5m)

労働福祉会館の東側の山道を南に進むと字岩神の山腹に巨岩があり、これがご神体である。その西側の石の表面に「石鎚山大権現」と彫られている。巨岩の下には、石鎚山別院名の入った



神像が祀られているという。現在、ご神体の正面には、石鎚山別院銘のローソク立てと、その両側に石鎚神社・石鎚本教銘の御神酒2本が祀られていた。また、裏面に石鎚神社祈禱家内安全守護の木札が祀られていた。

②⑤ 木野山神社 (花野)

木野山神社は、七日市町南東の花野にある。拝殿(間口4m)・幣殿・本殿を有する神社である。昭和51(1976)年4月に建立された百年記念碑には、「明治11(1878)年、この地方に伝

染病の痘瘡(天然痘) とうそう てんねんとう が発生したので、当地の山伏行者円寿院荒川嘉之エ門が法力をもってこの地に美星町の木野山様から当地に木野山様を分祀し、その靈験により伝染病のまん延を免れた。その後、孫の円寿院三世宝月院浄道荒川年夫がこれを継ぎ、氏子の子孫繁栄を祈願して来た」と記されている。しかし後継者がなく、現在は武速神社の宮司に祭祀をお願いしている。



お祭りは4月第2日

曜日と10月第2日曜日に境内左手に鎮座する六社稻荷神社(間口247cm・奥行165cm)、右手に鎮座する佐藤神社(間口140cm・奥行130cm・高さ135cm)など7社と共に行われ、各氏子の家には、木野山神社と六社稻荷神社のお札とお洗米、お餅が配られている。

②⑥ 花野池

七日市町字花野にある花野池は、総貯水量約19000m³、満



水面積約8000m²、せき止め堤防約100mの谷池(谷をせき止めて造った池)である。築造は江戸時代以前で、平成9(1997)年池の灌漑用水利用農家30戸と農林課資料に記載されている。

しかし、平成30年現在、利用農家は8戸に減少している。

上出部編

上出部は江戸時代、上出部村と言ひ山陽道に沿って形成された街村で、文政年間（1818～1830）の記録によると「石高 535 石・家数 126・人数 538・牛 26・馬 3」と記され、農閑期には男は干鰓（うどん）・素麺（そうめん）を作り、女は木綿を織っていたと書かれている。（岡山県の地名より）また、下記山陽道絵図（山口県文書館所蔵行程記より）の左下の上出部村では、現出部公民館あたりに高札場が赤線を引き描かれ、赤線の先に「此札場枚数 2 枚（1 枚捨高札（お尋ね者）・1 枚暇名切支丹札）」と書かれており、その南に巖山大権現（岩山宮）祭礼 9 月 9 日より 10 日、高札場の少し北の庚申橋のところに「石橋長さ 1 間」、高札場の北西にある天神（天神社）祭礼 8 月 24 日より 25 日と記されている。



① おさん 正一位王山稻荷神社

（間口 54 cm・奥行 88 cm・高さ 150 cm）

県道笠岡井原線の山王バイパス道路から右に分かれ、山王に通ずる道路（俗に勾配がきつい坂から神戸坂という）を 50m ばかり登ると左手坂道に 16 本の赤い鳥居とのぼりがひるがえり、その奥の大きな岩盤の前の基壇の上に鎮座する木造銅板葺の小祠が正一位王山稻荷神社である。

これは江戸末期の慶応元（1865）年頃、的場

地区の人々が、山の安全と作物の豊作を祈願した場地区の守護神とするため講社をつくり、伏見の

稻荷大神の分霊を授かり、初代猪原廣三郎（高行）氏所有の山中に、的場集落の総意で祀った



のが始まりと伝えられている。明治の中頃から大正の初め頃までは、祈祷師（山法師）が住み社守りをしてきたという。



正一位王山稻荷のご託宣は、一生に1つの願いごとは、必ず叶えて下さるといわれ、明治25（1892）年から35（1902）年頃の全盛期には、参道附近に飲食店・土産物店など数十軒が軒を連ね、時には掛け小屋を造り芝居の興行も行われるなど、大変な賑わいであった。明治末と昭和の初めには、稲荷様のお陰を受けたと多額の寄付をされた他地域の方もいた。

しかし、大正時代になると以前のような賑わいは見られなくなったが、講員たちによる信仰は続けられ、昭和60（1985）年山王への新道路拡張舗装工事に伴い、昭和61（1986）年社務所を再建し、参道の舗装や手すりを設置し、さらに平成15（2003）年以降、老朽化した鳥居は新しく奉納し直されている。平成28年現在も4代目猪原猛（祐教）氏を中心に26社39名の講員たちにより、5月第2日曜日、宮司を招いて春季大祭が厳粛盛大に挙行されている。

② 鎌田城跡

県道笠岡井原線の山王バイパス道路（運動公園野球場附近）西側の階段を上ると、鎌田山の突端に出る。ここは標高80m位だが、北を旧山陽道が通り、西江原・井原・出部地区を眼下に見渡せる交通の要衝の地であ



る。ここに中世鎌倉時代、東西180m、南北160mの山城、鎌田城が築かれていた。

備中府誌によると、鎌田城主、鎌田兵衛尉正清は、相模（神奈川県）出身で、源義朝のもとで活躍した勇敢な関東の武将で、下出部町の戸木荒神山城主、長田庄司忠致の娘を妻にしたと伝えられている。正清は、保元・平治の乱で源為朝や平重盛の軍勢と勇敢に戦った。また、正清の長男藤太盛政・次男藤次光政は、共に源義経の家来となり、義経の四天王といわれるほどの勇敢な武将だったが、盛政は源平・一の谷の合戦で、光政は源平・屋島の合戦で相次いで亡くなり、義経を悲しませたという。やがて、16世紀後半（1560～80）には、安芸の国（広島県西部）を中心に勢力を伸ばしていた毛利氏の所領となり、水川与惣左衛門尉が、この城に来て治めたと記されている。

ここは、昭和42年に始まった県道笠岡井原線の山王バイパス工事で元の姿がなくなり、現在は民間の墓地になっているが、その一角に昭和59（1984）年12月吉日、上出部町の井上恒雄・石井充両氏により「為鎌田城諸士之霊供養塔」の石碑（高さ148cm・幅18cm）が建立されている。

③ 寺子屋を開いた安井権頭・安井大賢の墓

江戸時代中頃から庶民の間で学問の欲求が高まり、幕府も庶民教育を奨励したので、この頃から幕末にかけて寺子屋が増加していった。

一橋領上出部村でも、天保2（1831）年～明治5（1872）年、神官・安井権頭が教師となり、男子40名、女子10名を集めた寺子屋を開いていた。

同村では、他に安井大賢も安政5（1858）年



～明治5（1872）年にかけて同規模の寺子屋を開いていた。

これは、鎌田城跡地にある墓地に眠る安井権頭（高さ 280 cm・幅 24 cm）、安井大賢のお墓（高さ 110 cm・幅 50 cm・自然石）である。

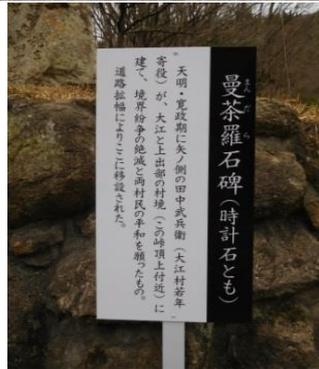


④ ^{まんだら}曼荼羅石碑（光明真言塔）

県道下御領井原線の井原市運動公園を抜けて上出部町と大江町の町境の道の西側に高さ 1.8 m、幅 1.2mほ



どの自然石の真ん中を 2 cm ほど彫りくぼませ曼荼羅石碑が建立されている。中央にアビラウケン^{アビラウケン}の梵字 5 文字、周囲に光明真言の 23 の梵字が円形に刻まれている。



これは曼荼羅図に似ていることから曼荼羅石と呼ばれているが、正式名は光明真言塔と言うそうである。

江戸時代、上出部村と大江村の村人の間で、村境をめぐる争いが度々起きていた。大江村の年寄役で信仰心の厚い田中武兵衛が、天明年間（1781～1789）にこの曼荼羅石碑を村境に建立し、上出部村との村境紛争が起きないことを祈願したのである。碑の上部には「天下泰平・日月清明」（晴れやかな日々が続くように、紛争なき平和な日々が続きますように）との文字が刻まれ、下部には、施主田中武兵衛と刻されている。

市内ではこの峠を曼荼羅峠と呼ぶ。

⑤ ^{おうさん}正一位王産稻荷神社（通称 常国稻荷）

（間口 55 cm・奥行 81 cm・高さ 158 cm）

井原市運動公園野球場の県道をはさんで西側の坂道^{こまいぬ}を登ると一對の狛犬と石の鳥居が見える。これが正一位王産稻荷神社の入口である。さらに 8 本の鳥居と両脇の 19 基の石灯籠



のある参道^{たまがき}を登ると玉垣に囲まれた岩盤の前の基壇上に同稻荷の木造銅板葺の屋根の小祠が鎮座している。

参道にある昭和 58 年建立の石の説明版には正一位王産稻荷大明神について「大正元（1912）年頃、出部村中田栄寿氏が京都伏見稻荷大社の御神霊を拝戴して帰り、大正 15（1926）年同村常国稚英氏他 25 名の講員を募り、同村安藤富平氏所有の当山に王産稻荷大明神を祀り崇拝したのが始まりである。以来、靈驗あらたかにして信仰者も多数あり、昭和 36（1961）年現社殿に遷宮された」と記されている。そして、別の石の説明版には「家内安全・商売繁盛・交通安全」にご利益があると記されている。

昭和 60（1985）年には、60 周年記念植樹が行われ、参道に桜の苗木がたくさん植えられた。また、石灯籠や石の鳥居も、昭和 62 年～63 年頃に寄進されたものが多く、鉄製の赤鳥居は平成に入ってからのものである。

常国良一家の話では昭和 60 年頃が最盛期で多くの参拝者があり、平成 18 年頃までは、宮司を招いて春季大祭が開かれていた



が、平成 28 年現在は、当家と分家で月並講をして神社の崇拝が続けられている。

⑥ 岩山神社（岩山宮）



6 世紀前半の安閑天皇の頃、上出部の地に来履屯倉（皇室御領地）が置かれた際に、吉備津神社の摂社、巖山宮の御分霊を奉祀し、岩山大明神と称したのが始まりと言われている。元禄 4（1691）年建立の出部公民館前の古い鳥居には、岩山大明神と刻されている。

御祭神は、吉備中山大地主神、吉備津彦命、大己貴命（大国主命）の三柱の神で、御神徳は、家内安全・交通安全・除災招福・心願成就など。明治元（1868）年、岩山神社と改称された。

社殿は、文永 2（1265）年から明治 1 2（1879）年まで数回の修築が行われたことが、棟札から判明している。そして昭和 8（1933）年現在の社殿に再建された時には「社殿再建記念・昭和八年十月竣工」と寄進者名が刻された青銅製の円柱碑（高さ 1.6m）が建立されている。また



再建時、社殿造営記念林として神社周辺に松・モミ・ヒノキ・杉などが植えられた。社殿入口右手に「社殿造営記念林」の石碑（高さ 1 5 0 cm）が建立されている。

岩山神社と同時に改築された隨身門（矢大神・左大神の門守の神が安置されている）は、阪田齋次郎（セーラー万年筆の創業者）が寄進している。彼は昭和 10（1935）年本殿周囲の玉垣もすべて奉獻している。



そして、昭和 60（1985）年には社務所が新築され、さらに平成 25（2013）年修復工事が行われ、現在に至っている。

氏子は上出部一帯。お祭りは、以前は 10 月 17・18 日に行われていたが、現在は 10 月第 3 日曜日とその前日に開かれている。宵祭りには、備中神楽が奉納され、翌日は、お湯釜神事や子供相撲が行われ、あわせて出部中部少年団が子供神輿を担ぎ、上出部地区内を練り歩き、お祭りムードを盛り上げている。

◎岩山神社境内社 1（岩山神社境内にある神社）

⑥-1 御崎神社

（間口 42 cm・奥行 44 cm・高さ 77 cm）

境内東側の一番北の神社。神が来臨される前に姿を現す使者神（御崎）を、地域・家庭の守護神としてお祀りしている。



⑥-2 地神碑

御崎神社の南にあり、石の台座に五角柱の地神2体が祀られている。



地神(北側) = 高さ

95 cm: あまてらすおおみかみ天照大神・おおなむちのかみ大己貴神・すくなひこなのかみ少彦名神・はにやすひめのかみ埴安姫神・うかのみたまのかみ倉稻魂神。

地神(南側) = 高さ 53 cm: 大己貴神・少彦名神・埴安姫神・倉稻魂神。

2個の自然石の台座の上であり、いずれも豊作と地域の安全を守護する神(祭り等詳細は武速神社の地神の項参照)。

⑥-3 さんぼうこうじんしゃ 三寶荒神社 (げんこうしゃ 元高社)

(間口 55 cm・奥行 90 cm・高さ 150 cm)

隨身門の前、一段高い所にある神社。戸木荒神社の御分霊で素盞鳴尊が祀られている。



氏子は元高社 6 戸と三面社 8 戸でそれぞれ年 1 回荒神講を開いている。式年祭は合同で神楽の奉納を行っている。

⑥-4 みょうげん 妙見神社

(間口 79 cm・奥行 96 cm・高さ 170 cm)

隨身門のすぐ前にある神社。境内神社の記録に見られない神社。北極



星・北斗七星をお祀りしている。災害滅除・長寿延命などに靈験があると言われている。

◎岩山神社境内社 2 (社務所奥 30 mにある神社)

⑥-5 えびす 恵美寿神社

(間口 55 cm・奥行 70 cm・高さ 80 cm)

一番北側の小祠でことしろぬしのみこと事代主命が祀られている。商売繁盛の神。事代主命は大国主命の御子神で、大国主命に代わって国譲りの言葉を述べられたことで有名である。



⑥-6 みくまり 水分神社 (りゅうおう 竜王様)

(間口 42 cm・奥行 44 cm・高さ 75 cm)

北から 2 番目の小祠で、水の分配を司る神、水分神が祀られている。昔は竜王様と呼ばれていた。竜王とは竜族の王



で、降雨を司る神である。昭和 20 (1945) 年まで宮山山頂にあり、日照りの続く時には、大勢の大人や子供たちが小麦わらの小束に火をつけ「雨降らせ給え竜王殿」と叫びながら山頂に向かいあまご雨乞いをしたと言われている。その後、現在の位置に移された。

⑥-7 こんびら 金毘羅神社

(間口 43 cm・奥行 44 cm・高さ 76 cm)

北から 3 番目の小祠で、おおものぬしのかみ大物主神が祀られている。主として航海の神様、総じて交通安全の神様。



⑥-8 じゅうにしんしゃ 十二神社

(間口 43 cm・奥行 44 cm・高さ 77 cm)

北から 4 番目の小祠で、ついたてふななどのかみ衝立船戸神が祀られている。地区の境で邪霊邪鬼の侵入を防ぐ神様。



◎岩山神社周辺にある史跡

⑥-9 ^{にちろ} 日露戦争戦勝記念碑

(高さ 240 cm・幅 104 cm)

明治 37 (1904) 年 2 月、日本がロシアに宣戦布告し、明治 38 (1905) 年 9 月、日露講和条約で終結した日露戦争の勝利を記念し、出部村有志 (総代 出部村長 大橋良三郎) が、明治 40 (1907) 年 3 月に建立したもの。碑文は、三島毅 (号中州、幕末の漢学者、文学博士東大教授、二松学舎大学創設者学長、現在の倉敷市出身) に依頼している。裏面に 出部村の全従軍者・戦病死者名が記載されている。(陸軍 90 人、戦死 4 人、病死 3 人、海軍 5 人、戦死 1 人)



⑥-10 岩山神社常夜燈

天保 14 (1843) 年に建立されたこの常夜燈は石垣基壇 (159 cm) の上に土台石基礎 3 段 (90 cm)、その上に常夜燈 (2m) が建立された立派なものである。竿の部分に天照皇大神宮・吉備津宮・金毘羅大権現と建立年が彫られている。



⑥-11 道しるべ (左 ^{かみかたへ} 上加多遍)

(高さ 116 cm・幅 45 cm)

江戸時代は京都に御所があったため、京都及びその周辺を「上かた」と呼んだ。さらに広く大阪等畿内全般を指す場合もある。



⑥-12 ^{けんくんばん} 献薫盤 (香を献上する台)

(高さ 1m・幅 29 cm)

線香やお香を供える台と思われるが、どこから来たものか定かでない。



⑥-13 ^{おたびしょ} 御旅所の休み石

(中央、高さ 45 cm・幅 1m)

出部公民館の前にある 3 つの石が御旅所の休み石である。武速神社



の夏祭りでは以前、出部公民館辺りまで神輿が巡行し、そこで休憩する所を御旅所と言い、神輿を置く台を休み石と言った。実際には休み石は目安で木の台の上に置かれたそうである。

⑥-14 ^{みたらい} 御手洗井筒

出部公民館前にある井筒で、岩山神社の神域にあり、周囲に石囲いがあり、水辺に降りる石段も築



かれており、田畑の灌漑用水ではなく、神事に使われたと考えられる。現在は危険なため井筒は埋められている。

◎井笠鉄道廃線跡

⑦-1 出部駅跡

井笠鉄道は、大正 2 (1913) 年井笠軽便鉄道(株)として発足、大正 4 (1915) 年井笠鉄道(株)に改称、大正 14 (1925) 年に高屋線



(井原～高屋間) が開通、昭和 15 年 (1940) に

は神辺まで延長された。(神高鉄道買収)

地区民の足として大いに利用された井笠鉄道も、道路整備によるバス路線の発達や自家用車の普及により、昭和 42(1967)年廃線となった。

出部駅は出部公民館の西 150mの井原鉄道高架下にあった。

⑦-2 いづへ駅の石柱

(高さ 70 cm・幅 22 cm)

この石柱は旧山陽道から井笠鉄道出部駅への道しるべである。



⑦-3 井笠鉄道廃線跡・桜木附近

旧井笠鉄道は、井原駅から高屋駅への鉄路は桜木交差点から上出部町に入っていた。現在、井原自動車の南から斜めに入る道が廃線跡である。



⑧ 井原西国三十三観音霊場十六番観音堂

(本尊清水寺〈京都〉千手千眼観音、間口 142 cm・奥行 161 cm・高さ 260 cm)

出部公民館西 250mの井原鉄道高架南の山すその墓地の一角に、平成 13(2001)年 12 月吉日に再建された十六番観音堂がある。お堂の中の左側に千手千眼観世音菩薩の石像(高さ 75 cm・幅 35 cm)、右側にお大師様の石像(高さ 46 cm・幅 20 cm)が安置され、その前に昭和 36 年改修記念と刻された石の大きな線香立てが置かれている。



また、お堂の西側に「京の十六番 きよ水」と

書かれた千手観音の台座(高さ 46 cm)とお地藏様の石像(高さ 46 cm・幅 20 cm)がある。さらにお堂の東側に 11 基の牛供養碑がきれいに並び設置されている。

⑨ 井原西国三十三観音霊場十五番観音堂

(本尊今熊野観音寺〈京都〉十一面観音、間口 164 cm・高さ 4m)

十六番観音堂の西 50mの墓地の一角に、平成 13(2001)年 12 月吉日に再建された十五番観音堂がある。その中の左側に十一面観世音菩薩の石像(高さ 75 cm・幅 33 cm)が安置され、台座(36 cm)に十五番とあり、十五番札所であることを示している。そして右側にも中央にもお大師様の石像(高さ 65 cm・幅 25 cm)が安置されている。



お堂の西側に「奉建立宝篋印塔子時宝曆十三(1763) みずのとひつじ 癸未年當村女中講中」と刻された古い宝篋印塔(高さ 2.5m)がある。また、東側墓地内に法界碑(高さ 120 cm・幅 32 cm)がある。



⑩ 原地蔵堂 (間口 2.1m・奥行 2.1m)

この辻堂は、上出部町原にあり、お地藏様をお祀りしていることから原地蔵堂と呼ばれる。お堂の中央に大きな石のお地藏様の立像(高さ 65 cm・幅 18 cm)が安置され、左右 3 体ずつ小さな



石のお地蔵様が坐像が安置されている。かつては尼さんが住んでいた。ここはかつて上出部から下出部・笹賀に通じる主要な道路脇にあり、人々の憩いの場であったと思われる。



また、左奥手には、この地に葬られた 24 柱の無縁仏のお墓が整然と並べられ供養されている。

現在も毎年 8 月 23 日には、原地区内の 2 軒の当番が中心になり、お地蔵様の祭りをし、参拝者にお接待を行っている。

⑪ 恵美寿神社

上出部町の旧山陽道沿いの南側に、上町、中町、下町 3 つの恵美寿神の小祠が祀られている。

また、出部小学校東の水路上には、後的場地区の恵美寿神が祀られている。

これは松江市美保ヶ関町の美保神社の御神霊を拝戴したもので、ご祭神は事代主神である。恵美寿様は、商売繁盛の神として知られているが、当地では併せて家内安全・学業向上を祈願するという。

・上町恵美寿様

(間口 30 cm ・ 奥行 40 cm ・ 高さ 72 cm)



・中町恵美寿様

(間口 30 cm ・ 奥行 40 cm ・ 高さ 72 cm)



・下町恵美寿様

(間口 56 cm ・ 奥行 90 cm ・ 高さ 127 cm)



・後的場恵美寿様

(間口 56 cm ・ 奥行 82 cm ・ 高さ 135 cm)

祭礼は、上町・下町では 1 月に、後的場では 2 月に、祭礼と直会を行っている。中町では 1 月に願掛けを 1 2 月に願ほどきの祭礼を行い、その後、直会を行っている。

⑫ ^{てんじんじゃ}天神社 ^{すがわら}(菅原神社)

(間口 1.6m ・ 奥行 2.4m ・ 高さ 3m)



この神社は、かつて岩山神社の摂社として菅原神社が記載されており、岩山神社境内にあったが、江戸時代に上出部町中町に遷座されたと伝えられている。摂社にしては大きな本殿で、柱もけやきを使い、台座を八角柱に本殿を円柱にするなど手の込んだ造りで、獅子や雲形の彫刻も施されている。屋根も棟瓦にしゃちほこ鯨や龍の瓦、両側や前面、後面には 6 個の鬼瓦で装飾がほどこされている。さらに軒先前面の両端には鶴・亀の瓦、後面の両端には蓮の葉を臥せたような瓦で飾られるなど、装飾瓦がふんだんに使われている。

現在は岩山神社の祭典に合わせて祭事が行われ、清掃も岩山神社の当番が月に1回行っている。

境内の本殿右側に金彦神社と自然石に彫られた石碑（高さ106cm・幅46cm）が祀られ、左側に福德正一位稻荷神社の小祠（間口44cm・奥行90cm・高さ134cm）が祀られている。左手前に総高3mの自然石でできたご神燈がある。

天神社の本殿は、平成30年3月修復された。



子どももよくこの水を飲んでいたという。（現在は、道路下1mのところに暗渠として保存）

現在「源泉こいの川跡」の碑（幅121cm・高さ91cm）が建立され、そこに片山正巳作詞、こいの川慕情の第4楽節の歌詞が刻まれている。今も多くの人が訪れ往時を懐かしんでいる。



⑬ 九沓池（通称、こぶつ池）跡

現在の井原市運動公園野球場は、九沓池を埋め立てて造られた。



◎上出部町の井筒

出部地区では、小田川の伏流水が泉となって湧き出るのを利用して井筒を掘り、江戸時代から明治・大正・昭和にかけて田畑の灌漑用水として利用され続けていた。以下は上出部町の井筒とその利用状況である。

⑭-1 古井の川

出部小学校の北西、塀の角から1mの所に、校歌にも歌われる古井の川があった。



約1m四方で深さ80cmほどの小さな泉だったが、いつも地下水がこんこんと湧き出て、どんな日照りでも水は枯れたことがなかった。夏は冷たく冬温かで、そのうまさは今騒がれているうまい水にも優るとも劣らない名水で、大人も

⑭-2 鯉の川（堂弦）井筒

一方、その南側にある鯉の川（堂弦）井筒（5.4m×3.6m）は、夏は子どもたちの水泳場として賑わっていた。この水もどんな日照りでも枯れることなく田畑を潤していた。宅地化が進み現在は使用されていない。



⑭-3 鹿木戸井筒

鹿木戸井筒は、上出部町杉の木鹿木戸にある井筒で、昭和45（1970）年までは、九沓池（通称、こぶつ池）の水を利用していましたが、埋め立てて



野球場に転化したので、その代替えとして井原市が掘った井筒である（平成28年現在、3戸の農家が利用している）。

⑭-4 ^{いくさ もり} 軍の森井筒

軍の森井筒は、上出部町前的場の庚申橋の北西にある井筒で、鹿木戸井筒と同様、九沓池の代わりに井原市が掘った井筒である（現在、3戸の農家が利用している）。



⑭-5 川上井戸（桜木井筒）

川上井戸は、上出部町杉の木東字桜木にある井筒（4.5m×4.5m）でポンプ室（3.2m×4.2m）がある。平成30年度現在7戸の農家が利用している。



⑭-6 昭和井戸

昭和井戸は上出部町下町にある井筒（6m×5m）でポンプ室（5.3m×2.6m）がある。出部地区は昭和13（1938）年の大干ばつに続き、翌14年も前年以上の大干ばつに見舞われ、田植えの水にも事欠く状態になった。そこで耕作者が協議し7月初旬、各戸総出で井筒を掘って湧水に対処したのが、この2つの井戸である。両井戸ともポンプアップして平成28年現在10戸の農家が利用している。



⑮ ^{さんぼう} 杉ノ木三寶荒神社

（間口 56 cm・奥行 78 cm・高さ 140 cm）

杉ノ木公民館の西隣に杉ノ木三寶荒神社がある。境内には4つの社が祀られている。北の道路側から2番目の大きな社が、三寶荒神社（宝殿・御祭神素戔鳴尊）である。氏子は、井上株・石井株・安井株である。



各株内では毎年当番の家に集まり、三寶荒神を祭る講が行われているが、7年毎の式年祭には、三株合同で盛大に式年神楽も奉納されている。他の3社は株内神で、このような小祠は、地域内に数多くあり、毎年株内の当番宅に集まり、講を行っている。

⑯ 「水越」^{こうしん}の庚申橋



旧山陽道の岩山神社前を流れていた川に架かっていた木の橋があった。大水が出ると橋が下流へ流れていったという。その後、丈夫な木造の橋が造られ、現在の橋（長さ19m）が出来たのは昭和36（1961）年4月である。

庚申橋の由来は、橋の南西端に「庚申講供養之橋」元禄五年三月吉日・施主 猪木平右」と彫られた石柱（高さ55cm・幅17cm）があるところからこれにちなんで名付けられたものと思われる。



笹賀編

笹賀は、江戸時代寛永備中国絵図では「^{しのが}篠賀村」と記されているが、その後笹賀村となり、文政13（1830）年の後月郡村様子書（安井文書）では、石高406石余、家数151・人数652と記されている。

また、下記山陽道絵図（山口県文書館所蔵行程記より）の山陽道より北が笹賀村である。北東に南斗山金敷寺（金鋪寺本堂、一時金敷寺とも呼ばれ仁王門脇に碑が建っている）や金子坊（金庫坊）・観音・新坊（新之坊）・西ノ坊（西之坊）・仁王門などが描かれている。中央に八幡（笹賀八幡神社）祭礼8月24日より25日と記されている。西部の備中大橋のところには石橋一間と記されている。これを見ると薬師から西の野崎・川附から家後屋に至る笹賀村のようすがよく描かれている。



① 恋の川観音堂

（間口152cm・奥行205cm・高さ290cm）

新築された観音堂には、新しく鑄造された十一面観世音菩薩（高さ90cm・幅20cm）が安置されているが、観音堂右端に吊るされた鐘（銅製・鈴型直



径27cm・厚さ9cm)

には、「備中後月郡笹賀村恋之川観音・宝曆八(1758)辛卯正月吉日 施主講中」を刻されており、昔を物語る貴重な鐘であることが分かる。この観音堂では、昭和20(1945)



年後半まで毎年観音講が行われていた。

かつては、観音堂のそばに^{かなしくじ}金鋪寺関連の大師庵（恋の川庵、間口 3.6m・奥行 5.4m）があったが、明治 5（1872）年無檀無住の寺の廃止令により、明治 6（1873）年 10 月廃庵届が提出された。その後、大師庵には、修験者^{きほういんちやうがく}貴宝院長学が住み、祈祷を行っていた。その祈祷札が下出部町山足貞子家に今も残っている。その後も老尼僧が昭和 25（1950）年頃まで住んでいた。

◎観音堂周辺の史跡

①-1 ^{きほういんちやうがく}貴宝院長学供養塔

（総高 175 cm・幅 45 cm）

観音堂前西側に「奉 石 鎚大峰大権現四拾貳度満行 供養（養）塔・明治四拾貳年 一月吉日 大先達貴宝院長 学」と刻された石碑が建っている。これは大師庵に住んでいた貴宝院長学が、修験の山、大峰山・石鎚山に 42 度参拝し満行達成の供養塔である。



①-2 ^{まんだら}曼荼羅石碑（光明真言塔）

（高さ 130cm・幅 70cm・自然石）

かつての上出部村と笹賀村との村境にあり、争いのない天下泰平を祈願し建立されたもの。「アビラウンケン（中心文字）光明真言（周囲の文字）法界（下部の文字）願主・大橋吉左衛門」と刻されている。



①-3 首なし地蔵 （総高 88 cm・幅 42 cm）

首なし地蔵が 2 体並んでいる。西から 2 番目の台座に彫刻があり、前に水鉢が置かれている地蔵様が、イボや足の病気に靈験あらたかで近

郊一円から参拝者が絶えなかった地蔵様である。ご利益を受けた参拝者は「赤いよだれかけ」を奉納する慣わしがあり、かつては何枚ものよだれかけが掛けられていた。



①-4 牛供養碑と五輪塔

首なし地蔵の隣りに 6 基の古い牛供養碑と五輪塔 5 基（部分）があり、道を隔てて東側に昭和 13（1938）年建立の比較的新しい牛供養碑がある。



①-5 井原西国三十三観音霊場十七番観音堂

（本尊六波羅密寺<京都>十一面観音、間口 115 cm・奥行 134 cm・高さ 230 cm）

首なし地蔵の東隣にあり、台座（30cm）の上に十一面観世音菩薩像（高さ 77 cm・幅 33 cm・石像）が安置されている。



①-6 ^{ほうきやういんとう}宝篋印塔 （高さ 2.4m）

「宝篋印陀羅尼經」を納めた供養塔。台座に「宝曆十一辛巳歳（1761）七月吉日 笹賀村観音講中」と刻されており、江戸時代中頃に建立されたものである。



①-7 恋の川与五郎井筒

（南北 4.4m・東西 3.8m）

恋の川観音堂の西側にあり、コンクリートで囲まれた井筒の上には、かつてポンプ小屋があり、灌漑用



水として活用されていた。現在ポンプ小屋はなく防火用水となっている。

② 石鎚神社元老大顧問 石丸治作碑

(総高 310cm、幅 110cm、自然石)

恋の川観音堂より少し北の石丸工務店の前に大きな碑が建立されている。裏面に「発起者 日之出講 昭和 3 (1928) 年 4 月 建立 信者中 本村 石工猪原善平・井上石造」と刻されている。



石丸治作は笹賀の人で、江戸末期より伊予国(愛媛県)石鎚山に登拝し、日之出講(出部地区の石鎚講社)を結成、その講頭として活躍した。また、東洋大三備連合崇敬組合創立結成にあたり、主要な推進者として活動した。大正 8 (1919) 年、石鎚神社は全国の先達の中から 10 名の功労者に銀笏ぎんしゃくを与えたが、彼はその内の一人であった。石丸治作の所有する絵符番号は峯 24 番、彼は死の前年である昭和 7 (1932) 年までお山を勤めた。行年 77 歳。日之出講中部当番の春季大祭では、石丸元老大顧問を偲び出部日の出講員全員がこの碑の前で拝んでいる。

③ はっこう 八荒神社・いのもり 井森神社

(間口 3.7m・奥行 3.6m)

笹賀町畦地あぜちに八荒神社と井森神社が 1 つの社に一緒に祀られた神社がある。



これは明治 26 (1839) 年 10 月 14 日の風水害で小田川の堤防が決壊し、井原村新町の井森様が流され八荒神社のところへ流れ着いたので二神を一緒に祀るようになったという説がある。しかし、鳥居に「八荒神・井森宮 安政四丁かのと

巳年(1857)三月吉日総氏子中」と刻されていることから、この時すでに二神が一緒に祀られており、これ以前に前記の伝説のようなことがあったのか、井森神社(ご祭神 吉備武彦命)が降雨に靈験あらたかな神様なので一緒にお祀りするようになったかは、定かではない。

昭和 58 (1983) 年新築された社には、中に新築寄付者 40 名、特別寄付者 8 名が記された板が取り付けられている。

お祭りは、笹賀八幡神社の大祭と一緒に 10 月第 3 土曜日に行っている。ただ八荒神社の式年祭は別途 11 月に開かれ、式年神楽も奉納される。

◎ 八荒神社・井森神社境内の史跡

③-1 十二神社 (間口 40 cm・奥行 65 cm・高さ 98 cm)

境内左奥にある株内講の小祠である。



③-2 地神碑 (高さ 70 cm)

境内右奥に普通は五角柱だが、ここには円柱の珍しい地神碑があり、あまてらすおおみかみ おおなむちのかみ すくなひこなのかみ はにやすひめのかみ天照大神・大己貴神・少彦名神・埴安姫神・うかのみたまのかみ倉稻魂神が刻されている。



③-3 地藏堂

(間口 104 cm・奥行 120 cm・高さ 195 cm)

境内右前方に小さなお堂があり、中にお大師様の石像が安置されている。台座に「細川六吉・細羽栄五郎・細川延市」と 3 名の寄進者の名前が刻されている。右手に三基の五輪塔がある。



③ 大正井戸

大正時代に田畑の灌漑用に掘られた井筒で、周囲には立派な石垣が築かれていた。



しかし、田畑の宅地化が進み、利用者もなくなり、石垣も崩れてきたので井原市に寄付された。市はセメント管に改修し、防火用水として活用している。

◎ 大正井戸周辺の史跡

④-1 阿弥陀堂

(間口 106 cm ・ 奥行 120 cm ・ 高さ 200 cm)

小さなお堂に、阿弥陀様の石像2体(高さ左 46 cm ・ 右 54 cm ・ 幅共に 20 cm)と牛供養碑1基が安置されている。お堂の外にも牛供養碑1基が安置されている。このお堂は、周辺の18軒でお祀りしている。



④-2 曼荼羅石碑 (光明真言塔)

(総高 190cm、幅 60cm、自然石)

中心文字「アーク大日如来」周囲文字「光明真言」「昭和十一年(1936)二月一日 四国西国石鎚山四拾度満行 供養塔 白真紅覚居士 細川近三郎」と下部に刻されている。細川家は代々信仰の厚い家で、細川近三郎も明治33(1900)年、若くして妻を亡くしたが、独身を通し石鎚登拝を続けた。そして満行達成後、昭和10(1935)年12月15日亡くなった。(行年79才)この曼荼羅碑は彼の没後、供養碑として建立されたものである。



⑤ おきぎ 起木の薬師堂 (間口 6m ・ 奥行 6m)



起木の薬師堂は、笹賀町の東端、井原町との境にあり、ご本尊は行基が刻んだと伝えられる薬師如来。脇侍の日光菩薩・月光菩薩と共に黒塗りの厨子の中に安置され、秘仏として60年に一度の御開帳となっている。左に八大龍王・不動明王、右に大師像2体が安置されている。



起木の薬師堂については、次のような楠のいわれが残されている。今から約1300年あまり前、行基が金鋪寺建立のため、奈良の都から楠谷の麓にさしかかった時、楠の大木が倒れ道を塞ぎ通ることができなかった。困った行基は「楠よ、心あれば立ち上がって道を塞ぐのを



金鋪寺絵図【宝暦11年(1761年)】

やめてくれ。私が金鋪寺を建てた暁には、お前をもって薬師如来を刻み礼拝するであろう」と諭した。すると不思議なことに翌朝倒れていた楠が起き上がり道を開けていた。行基は金鋪寺建立の後、約束通り、お堂を建てその楠で薬師如来を2体刻んでそこに安置した。倒れた楠が起き上がったことから、起木の薬師様と呼ばれるようになった。ところがその1体が、笠岡市北川の円福廃寺跡（現持宝院）に走って出て行ったので、そのままそこに安置され「走出の薬師様」と呼ばれるようになった。この2体の薬師様は眼病にご利益があると尊崇されている。

この起木の薬師堂には、昭和の初年から20年頃まで三島正祐（修験者、高屋町神宮寺の山伏毛利正賢の弟子）が堂守りとして入っており、修験道の開祖が発見したという薬師の霊水も湧き出していた（現在も手水鉢のある下方にあり、今もぽとぽと水がわき出ている）。

起木の薬師堂では、毎年5月の連休明けの土曜日に起木薬師大祭が開かれ、金敷寺・金鳴寺住職の読経に続き甘茶の接待が行われている。

◎起木の薬師堂境内

⑤-1 井原西国三十三観音霊場二番観音堂

（本尊 紀三井寺<和歌山>十一面観音、間口107cm・奥行120cm・高さ250cm）

起木の薬師堂の左手前に小さなお堂があり、その中の右手に「紀州の里二番紀三井寺」と刻された台座（高さ30cm）の上に、本尊の十一面観世音菩薩（高さ74cm、幅30cm）が安置されている。左手には、お地蔵様2体が安置されている。周辺に稲荷神社の小祠が2社と、五輪塔5基や牛供養



碑19基、石の地蔵様2体などが一緒に安置されている。



◎ 起木薬師堂参道入り口付近

⑤-2 道しるべ

（高さ125cm、幅55cm、自然石）

「備中西国道十四番金鋪寺本堂迄五丁（545m）」と自然石に刻されており、ここから備中西国十四番観音霊場、金鋪寺本堂まで約500mという道しるべである。



⑤-3 四角柱の道しるべ

（高さ70cm、幅18cm）

「奉 西かんおん道、北いばら、東かみがた道、宝暦

四（1754）年八月建 上出部村岡田政兵衛、昭和九（1934）年四月五代の孫 岡田龍太郎再建」と刻されている。ここにある「かんのん道」は金鋪寺本堂への道である。

⑤-4 起木薬師堂周辺石碑・3基

★石碑（高さ150cm、幅35cm）

「起木薬師堂大津寄吉郎兵衛殿、寄進によりて薬師堂古有の地、氏子中各位寄

進者建之 鶴泉書」と刻されている。

★歌碑（高さ150cm、幅90cm）



「大津寄吉郎兵衛殿、遺徳を慕いて里人の仰ぎたたえん 後の世までも 昭和五十二（1977）年秋建之 鶴泉徳之書」と刻されている。

★石碑（高さ 138cm、幅 33cm）

「大津寄吉郎兵衛寄進の土地・宝暦十三（1763）年・二畝五歩（250㎡）」と刻され、裏面に「南斗山 行基菩薩開祖 今を去千年余薬師有志確認」と行基開祖を古文書で確認した喜びを刻している。

⑥ 虚空蔵堂

（間口 133 cm、奥行 155 cm・高さ 230 cm）

国道 3 1 3 号線の北側、中華料理紅蘭の西側

に小さなお堂があり、虚空蔵菩薩（高さ 90cm、幅 23cm、石像）が安置されている。台座には「昭和九（1934）年五月 建立 世話方 福原講中」と刻まれ、福原講中により新たに奉納されたことがわかる。しかし、その前に江戸時代の庄屋、大橋家が村人たちの



のためにお堂を建立。虚空蔵菩薩を安置したのが始まりと言われる。以前は国道の南側の道路脇にあったが、道路拡張に伴い平成 15（2003）年 1 2 月現在地に移され、お堂もこの時新築された。お堂の西側には他に古い地藏菩薩や五輪塔（部分・鎌倉・室町時代のも）11 基も安置され、さらにその西には高さ 2 m の古い石燈籠もある。

今も金敷寺住職を招いて、福原講中により毎年読経が行われている。

⑦ 笹賀稲荷 （間口 350cm、奥行 280cm）

出部小学校西の道路を北進し、国道 3 1 3 号線を渡ると 5 本の赤い鳥居が並び、その先の社が、笹賀稲荷である。もとは、福原稲荷神社とい

われており、天保 7（1836）年 8 月に福山の草戸稲荷神社の分霊をお祀りしたものとされている。昭和 5

0 年代の半ば頃に改築された社の奥の棚の上に

祠があり、中の真鍮製の鏡が御神体である。毎年 5 月 5 日に大祭が行われていたが、平成 8

（1996）年以降は途絶えている。

神社の右手に椋の大木がある。



⑦ 金鋪寺本堂



笹賀町金鳴にあり、仁王門・金鳴寺・金敷寺を過ぎ、さらに山道を北進し、78 段の石段を登ると、金鋪寺本堂がある。左脇には元文 4（1739）年、右脇には寛保元（1741）年建立の石燈籠がある。本堂は明治 14（1881）年 3 月 1 日改築されたもので、かなり老朽化しているが、造りが 7 間（12.6m）四方の立派な建物である。

金鋪寺は天平 9（737）年聖武天皇の命により、僧行基が建立した寺と伝えられ、南斗山金鋪寺普門院と称し、七堂伽藍・僧院 12 坊・2 庵（恋の川・銅）、寺領 150 石を有する古刹で、小田川西の五カ村（井原・上出部・下出部・笹賀・敷名）の祈願寺であった。ご本尊は、閻浮檀金准胝

かんぜおんぼさつ

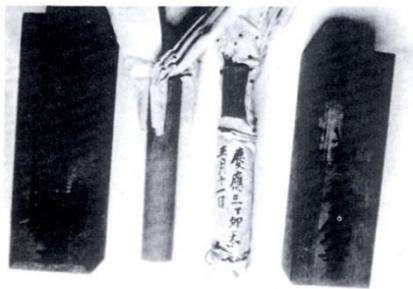
観世音菩薩で靈験あらたかな仏様と伝えられている。そして寺の年中行事は12坊が交代で執り行っていた。

南北朝時代には、^{はりま}播磨国（兵庫県西部）守護赤松則村（法名入堂円心）が、金鋪寺の観音様を深く信仰し、^{りやくおう}暦応3（1340）年には、寺を立派に改築。自分の念持仏をこの寺に寄進し安置したと伝えられている。



しかし、戦国時代の戦乱の頃に寺院も次第に廃滅し、江戸初期の慶長9（1604）年には、^{かねこぼう}金庫坊・^{うえのぼう}上之坊・^{いけのぼう}池之坊・^{あたらしぼう}新之坊・^{にしのおう}西之坊・^{におうぼう}仁王坊の6坊となり、寺領も15石に減らされていた。本堂はその後4回補修改築が行われたが、文政12（1829）年火災により本堂が焼失した。そこで天保11（1840）年一橋公の命により、江原陣屋元締役増島権六郎監督の下、12間四面の本堂が再建された。

金鋪寺では明治元（1868）年まで^{えよう}会陽（裸祭り）が行われ、参加者は恋の川の水ごり場で身を清め、金鋪寺まで登って真木を奪い合っていた。



金敷寺真木
南斗山金敷寺では明治初年まで、^{会陽}（はだか祭り）が行われていた。図は慶応3年（1867年）に投下された真木

（当山の真木は楠）が、^{だんか}檀家の寄進により現在も金嶋寺に保管されている。

ところが、明治5（1872）年に無檀・無住の寺の廃止令が出された。金鋪寺は無檀・無住で、寺の年中行事は有檀・有住の6坊が交代で行っていたため、6坊がそれぞれ独立し、由緒ある金鋪寺本堂は、6坊が共有保護することになった。前述の明治14（1881）年の本堂改築も、各坊及び各坊檀信徒協力の下に実施されたものである。

その後、明治23（1890）年、新之坊・金庫坊・上之坊・池之坊・西之坊を廃止統合して、新之坊の堂宇を保存し、金敷寺と称し、仁王坊は独立し当地の地名を取って金嶋寺と改称することになった。そして、金鋪寺本堂と仁王門は両寺の共有となった。

現在（2017）、本堂内は荒廃しているが、3体の仏像（左、高さ148cm・中、高さ168cm・右、高さ160cm）が残っており、ご本尊「大悲観自在尊」と思われる仏像（高さ155cm）が東側奥に横たわっていた（いずれも木像）。本堂西側には江戸時代の年号の刻まれた僧侶のお墓が沢山残っている。



◎ 金鋪寺本堂周辺の史跡

⑧-1 備中西国十四番

花山法皇靈趾塔

（高さ150cm、幅50cm）
金鋪寺本堂の東側に標記石塔が建立されており、その裏面に「為大法師賢空菩薩建之、明治四十四年（1911）十二月」と刻されている。これは花



山法皇が、寛弘元（1004）年に備中川上郡阿部深山に滞在された時、備中国に三十三ヶ寺の観音霊場を定め、自ら巡礼される予定だったが、5年後に崩御され、実現できなかった。そこで藤原朝臣重法が、花山法皇の遺志を継ぎ、巡礼したと後月郡誌に記載されている。花山法皇と言えば西国三十三観音霊場を世に広められた大恩人である。そこで備中西国三十三観音霊場の十四番札所に金鋪寺を指定された大法師（花山法皇）の遺徳を偲び、後日、僧賢空が檀家に呼びかけ建立したと想定される（1番上の台座に、寄進者名と寄進額が刻されている）。

⑧-2 **東照権現**（間口 1.8m・奥行 2.7m）

本堂の東前方、9段の石段を上ると、東照権現のお社がある。お社奥中段の祠の中に東照権現様（徳川家康公）をお祀りしている。その左手に木の像、右手に木の狛犬2体が祀られている。そしてお社は平成11（1999）年12月吉日に改修され、社内に社改修寄付者名を記した板が取り付けられている。現在も当地区民により、講が行われている。



⑧-3 **宝篋印塔**（総高 5.8m）

本堂西前方にあり、基段の上に5段の石段が積み、その上に高さ4mもある江戸時代中期の立派な宝篋印塔がある。「奉建立宝篋印塔 宝暦六丙子年（1756）極月（12月）



施主 井原村大津寄吉郎兵衛」（起木薬師堂の土地を寄進された井原町の名望家）と刻されている。

る。

⑧-4 **井原西国三十三観音霊場六番観音堂**

（本尊 壺坂寺<奈良>十一面千手千眼観音、間口 109 cm・奥行 108 cm・高さ 240 cm）

本堂西横に六番観音堂があり、十一面千手千眼観世音菩薩の石像（高さ 75cm、幅 34cm、台座 40cm）が安置されている。その前に2本の開基柱（高さ 65 cm・幅 16 cm）が建てられ「享保十一丙午（1726）年四月初八日」と刻されている。これにより、江戸中期に井原西国三十三観音霊場が開かれたことが分かる。



⑧-5 **大師堂**

（間口 112 cm・奥行 168 cm・高さ 360 cm）

本堂西側石段を上ってすぐ左手に棟瓦に龍や鬼、鯰の装飾瓦が使われた立派なお堂がある。中に台座（60cm）蓮華



（30cm）の上に錫杖を持って立つお大師様の石像（高さ 127 cm、幅 38 cm）が安置されている。

⑧-6 **井原西国三十三観音霊場四番観音堂**

（本尊 槇尾寺（大阪）十一面千手千眼観音、間口 180 cm、奥行 90 cm）

本堂に上る石段の中腹の東側に小さなお堂があり、中央に十一面千手千眼観世



音菩薩石像(高さ 75cm、幅 35cm)が安置され、台座(高さ 40cm)に「大さか四番まきおじ」と刻されている。そして、その後ろに7体のお地藏様が安置されている。

⑧-7 ^{まんだら}曼荼羅石碑(地藏真言塔)

(高さ 136cm、幅 38cm)
四番観音堂の左側に舟形石(長さ 90cm)の上に乗る変わった曼荼羅石碑がある。上部に「地藏真言八字」が円形に刻され、その下に凹みを作り、そこにお地藏様の石像がはめ込まれている。



⑨ ^{かなしきじ}金敷寺



元金鋪寺の5坊が明治23(1890)年に統合して新之坊の堂宇に移り金敷寺となり、5ヶ寺合併百周年記念事業として平成3(1991)年10月本堂が落成した。ご本尊は聖観世音菩薩で、他の4カ寺のご本尊と共に宮殿(厨子)に安置され、すべて秘仏で33年に1回御開帳される。



両脇には、川面稜一教授(川面美術研究所)の監督指導の下、研究員 久安勝士氏(笹賀町出身、日本画家、文化財修復士)が肉筆で描いた極彩色の巨大な胎蔵界・金剛界の1対の曼荼羅図(タテ 200 cm・、ヨコ 170 cm)が安置されている。

◎ 金敷寺周辺の史跡

⑨-1 ^{しょうろう}鐘楼と大師像

本堂の前の庭に昭和31年(1956)建立の鐘楼がある。その西隣に名越正二氏(笹賀町)が、平成15(2003)年奉納した修行大師像(高さ 200 cm、幅 80cm、ブロンズ像)が安置されている。



⑨-2 ^{ごま}護摩堂

本堂西側には、妹尾浅一氏(七日市町)が平成15(2003)年奉納の護摩堂がある。隣には光明真言の曼荼羅石碑、財団法人維持会設立記念塔、復興記念宝篋印塔(明治二十三年七月十一日 五ヶ寺統合供養塔)、奉修流水灌頂永代供養塔、薬師如来坐像などが並んでいる。



⑨-3 ^{しょう}お砂ふみ 聖観音及び百観音石仏

昭和62(1987)年金敷寺写経と法話の会が発足して10年を記念し、神辺町上御領の池田壽夫・安子夫妻の寄進により、お砂ふみ聖観世音菩薩(台座 1m、蓮華 0.7m、像高 3m)が金敷寺



の南東に建立された。また、夫妻は先祖代々の菩提供養と病氣平癒を願い、西国三十三観音・坂東三十三観音・秩父三十四観音の百観音霊場を何度となく巡拝され、いただいたお砂を金敷寺に寄進された。お寺ではそのお砂を境内の石畳の下に一ヶ寺ずつ納め、石畳を踏み本堂へお参りすると、百観音霊場を参拝したのと同じ功德が得られるようにした。

さらに夫妻は、百観音の石仏も寄進され、これらは、金敷寺周辺から金鋪寺本堂にかけて安置されている。

⑩ 子の権現

(間口 2m、奥行 2.3m・高さ 4 m)

金鳴寺から金敷寺への道の途中を西に曲がる坂道を登ると社がある。その中に祠があり、子の権現の石像(高さ 30 cm・幅 15 cm)が祀られている。



これは江戸時代、西之坊(金敷寺に統合されて現在はない)の住職が、富士山の北方にある「子の権現」の分霊をお祀りしたのが始まりである。この神様は寝小便や下の病氣、でも(腫)にご利益があると言われ、願をかけご利益があると、金の鳥居やさるこ(くくり猿)を奉納する習わしがあるという(現在も、アルミの鳥居やさるこが奉納されている)。前の簡易鳥居には「大正十二年(1923)建之、七日市町川本友四郎・末永元治郎」と寄進者名が刻されている。

毎年 11 月第 2 日曜日のお祭りには、近隣の人達によりお菓子のお接待が行われている。

⑪ 金鳴寺



元金敷寺仁王坊が、明治 23 年(1890)独立して金鳴寺になった。ご本尊は十一面観世音菩薩(定朝作、高さ約 40cm)は宮殿に安置され、33 年に一度ご開帳の秘仏である。最近では昭和 59 年(1984)本堂落成の時にご開帳されている。左手の不動堂には不動明王が、右手の大師堂には、お大師像が安置されている。

◎ 金鳴寺(本堂前庭西)周辺の史跡

⑪-1 キリシタン灯籠 (高さ 135cm)

本堂右手前にあり、真言宗の寺には珍しい。灯籠の下にマリア観音像が刻されており、檀家の方の奉納と伝えられている。



⑪-2 右近の橘

本堂左手前にあり、昭和 59 年本堂落成を記念して大覚寺門跡が植樹したもの。左近の梅は前からあったが、現在は枯れて切られている。



⑪-3 曼荼羅石碑(光明真言塔)

本堂左手前にあり、自然石(高さ 133cm、幅 73cm)に中心文字「アーク(大日如来)」、周囲文字「光明真言」、その下に「廻國供養・帰心安心信士・帰心妙心信女」と刻されている。



⑪-4 弘法大師一千百五十年遠忌倍増法楽塔

昭和 59 (1984) 年
施主 三宅^{えだたろ}权太郎。



⑪-5 弘法大師一千年忌 嘉會宝塔

天保 5 年 (1834)
施主 吉田安太郎



⑪-6 石の地藏坐像

(高さ 52cm、幅 27cm)
台座 (法印全寂)

⑪-7 宝篋印塔

(総高 215cm)

住職三世の頃なので
かなり古いと思われる。
その後の石碑には「紺紙
金泥大般若御無・・・、
奉寄付古筆十三」と刻さ
れている。



⑪-8 石の地藏立像

(高さ 83cm、幅 27cm)
台座 (法界)



⑪-9 鐘楼

昭和 59 (1984) 年
建立

◎金鳴寺 (本堂前庭東) 周辺の史跡

⑪-10 英霊堂

(間口 200 cm・奥行 157 cm・高さ 350 cm)

金鳴寺第五十一世住職 徳毛宜観^{ぎかん}氏が、第二次

世界大戦でラバウ
ルに出征し、終戦
後帰還された際、
戦没者の英霊を供
養する英霊堂の建
立を切望され、折
しも出部小学校の
奉安殿が取り壊さ
れることになった
ので、それを譲り



受け、屋根を四方屋根に改造して、出部地区の
戦没者の霊をお祀りしたのがこの英霊堂である。
井原市全体で戦没者慰霊祭が行われる前は、ず
っとここで出部地区の慰霊祭が行われていた。

五十一世住職と親交を深めていた厚生大臣
橋本龍伍氏 (故橋本龍太郎首相の父親) の位牌
も祀られている。

⑪-11 阪田翁頌徳碑

(高さ 180cm、幅 103cm、台座 65cm)

この碑は、興讓館館長 山下^{たかし}崇^{しゅうどう} (秋堂) の撰
文。名筆家として名
高い。金鳴寺第五
十一世住職徳毛宜観
氏の墨書。題額は仁
和寺門跡大僧正岡
本慈航氏に依頼し、
昭和 14 年 1 月 15 日
に建立されている。



「上出部町出身の
阪田齋次郎翁 (明治 3
<1870> 年 10 月 18 日生)
は、家運の不振^{ぼんかい}を挽回するた
め、志を立て発憤勉勵し、自
ら金のペン先を創作した。阪
田製作所の金ペン万年筆は、



天下需要の 5 分の 1 を占めるまでになり、昭和
3 (1928) 年 10 月紺綬褒章^{こんじゅうほうしょう}を受章し、昭和 11

(1936)年1月15日病逝した。翁は巨萬の資を得ても^{けんやく}儉約し、公益のことに率先して寄進し、金鳴寺も亦其徳幸を受け、荒廃した寺院の再興をはかることができた」との趣旨が刻されている。

碑の裏面に供養田七反貳拾参歩(約7006㎡)寄附と刻されている(彼は岩山神社の隨身門や玉垣も寄進している)。

⑪-12 井原西国三十三観音霊場三番観音堂

(本尊 ^{こかわでら}粉河寺〈和歌山〉千手千眼観音、
間口110cm・奥行110cm・高さ225cm)

金鳴寺南西の隅の所に110cm四方の小さなお堂があり、中の台座(高さ40cm)の上に千手千眼観世音菩薩の石像(高さ27cm・幅32cm)が安置されている。台座に「紀国三番粉河寺」と刻され、ここが三番札所であることがわかる。



岡山県指定重要文化財 木造金剛力士像 (平安時代の作)



吽形像 阿形像

旧金鋪寺山門内(現金敷寺・金鳴寺の仁王門内)にある。

^{あぎょう}が阿形像(像高352cm)、左が^{うんぎょう}吽形像(像高360cm)で、どちらもヒノキ材の寄木造りで、足首部分は2体とも後で補修されている。全体的に保存状態もよく、形・製作技法などから、平安末期の作と推定される。仁王像が、下半身に対して上半身が過大に製作されているところ、憤怒の表情がユーモラスであるところ、二の腕に天衣^{らせん}が螺旋状に絡まっているところなど、平安時代の特に畿内地方にのみ見られる仁王像の特色と酷似しているからである。平安時代の金剛力士像は、この像を含め全国に6例しかなく、岡山県下に残る平安仏像の中で最大である。平成元(1989)年、県の重要文化財(彫刻)に指定された。

⑪-13 仁王門 木像金剛力士像

(県指定重要文化財、
間口約5.4m・奥行約3.6m・高さ約5m)
かつて金鋪寺の山門であった仁王門の両脇に2体の木造の金剛力士像が安置されている。右



⑪-14 地神碑と金敷寺碑

地神碑は、仁王門の左手前にあり、高さ50cmの自然石の台座の上に自然石(高さ115cm、幅65cm)が置かれ、「地神」と大きな字が彫られている。そしてその左後方にも小さな地神碑(高さ78cm、幅18cm)がある。



仁王門の右手前に、

金敷寺碑がある。自然石の台座（高さ 30cm、幅 1 m）の上に自然石（高さ 157cm、幅 77cm）に「金敷寺」と刻されているのは、現在の金敷寺の碑ではなく、江戸時代金鋪寺を一時、金敷寺と呼んでいたこともあり、その時のものである。



⑫ 常夜燈と地神碑

A U ショップ井原の東隣の空き地の基壇の中に常夜燈と地神碑と一緒に祀られている。昭和六（1931）年九月改築と敷石に刻されており、竹を建て、注連縄



も張られている。毎年 11 月～12 月に石鎚講の人達都在这里で拜んだ後、^{なおらい}直会を行っている。

1) 常夜燈（総高 206cm）竿の部分に「奉燈てんぼう 天保六未（1835）十月産子中うぶごちゆう」と刻されている。

2) 地神碑 四角形の礎石の上に五角柱の台座があり、その上に五角柱の石柱（高さ 71cm）に「天照皇大神・埴安姫命・倉稻魂命・少彦名命・大己貴命」の 5 柱の神の名が刻されている。

⑬ 笠沢井筒

国道 3 1 3 号線沿いの日興サービスガソリンスタンドの東の道を 10 m ほど



南下した所に笠沢井筒があり、貯水池（3.6m × 5.4m）の上にポンプ小屋（2.7m × 5.4m）があ

り、平成 28 年現在、46 戸の農家が、灌漑用水として利用している。

⑭ 牛供養碑

（間口 1.4m ・ 奥行 1.2m ・ 高さ 1.7m）

笹賀公民館の少し東の小路のお堂の中に、6 基中央最大（高さ 57 cm ・ 幅 27 cm）の牛供養碑が安置されている。



⑮ 道しるべ

（高さ 60cm ・ 幅 15cm の石柱）

浜田純志氏宅前の道に「右川附 左高屋福山道」と刻された小さな道しるべがあり、左面に「高屋村中山喜次郎」と刻されている。



⑯ 笹賀八幡神社



笹賀町野崎にあり、笹賀公民館西の 44 段の石段を登り、九十九折りの坂道つづらを登ると、さらに 58 段の石段があり、ようやく八幡神社に到着する。大変な坂道なので昭和 52（1977）年神社までの参道が新設され自動車自動車で参拝できるようになった。

笹賀八幡神社の主祭神は、^{ちゆうあい}仲哀天皇・^{じんぐう}神功皇后とその息子の^{おうじん}応神天皇で、建立年は分らないが、改築は延宝六（1678）年、寛政四（1792）年と古い棟札に書かれており、古い鳥居の文字



が風化して読めないところから、改築棟札よりかなり古いと考えられる。平成 14 (2002) 年 9 月吉日笹賀町の氏子 347 名により、拝殿の新築や本殿等の屋根瓦の葺き替えが行われ、拝殿には久安勝土氏により修復された随身図(縦 1m・横 1.5m)他 4 枚の絵馬が掲げられている。



氏子は笹賀一帯で、祭礼は現在 10 月第 3 日曜日とその前日で、日曜日の午前中には、子供神輿みこしが区内を巡り、午後には、神社で神楽が奉納され、お祭りを盛り上げている。

⑰ 稲荷神社・瑜伽神社

(間口・奥行 1.8m・高さ 2.3m)

笹賀八幡神社の中段鳥居の東側にブロック造りの社があり、その中の赤塗の祠の中に祀られて



いるのが稲荷神社・瑜伽神社である。野崎北の東峠 1274 番地に祀られていたのを平成 9 年 5 月吉日、現在地に社を新築し遷宮したそうである。社の中に、浜田株 4 軒と佐藤株 4 軒の奉納者名が記されており、この 8 軒が当番を中心に春秋 2 回祭典をしている。祭典では祝詞を唱え

御神酒をいただき簡単な直会を行っている。

⑱ ^{はつだい}初大明神(間口 2.7m・奥行 3.6m・高さ 4m)

笹賀八幡神社の少し西に、初大明神の社がある。これは昭和 56 (1981) 年 6



月吉日野崎講社によって改築されたものである。奥の棚に 3 つの祠があり、中央が初大明神社、向かって右に道通神社、左に稲荷神社と神鬼神社が祀られている。当初は浜田家 3 軒でお祀りしていたが、現在は野崎地区 8 軒で毎年春に当番の呼びかけで社やしろに集い祝詞をあげ、御神酒をいただき、簡単な直会を行っている。

⑲ 横田井筒

国道 3 1 3 号線沿いの平川石油店北東に直径 2 m の大きな井筒がありその上にポンプ小屋 (3 m × 4 m) がある。これが横田井筒で、かつて灌漑用水として活用されていたが、現在は防火用水となっている。



⑳ ^{しらかわ}常夜燈と川附公民館・主要道路建設記念碑

白海公園の西側の道路脇の基壇の上に、地元の人が金毘羅様常夜燈と呼ぶ火袋



以外は自然石で金の刻字がある常夜燈 (総高 220cm) があり、地元の人が交代で祀っている。

その北側に昭和 25 年 (1950) 5 月建立の川附公民館と主要道路建設記念碑 (高さ 135cm・幅 80cm) が 2 つの自然石の基壇 (高さ 90 cm) の上に建立されている。

主要道路とは国道 3 1 3 号線から、白海公園

の西を通過して経ヶ丸へと続く道路である。

㉑ 地神碑 (高さ 78 cm)

白海公園の西側の道路を 20 m 北に進むと地神碑がある。これは四角の自然石の基壇の上に、五角柱の台座石(高さ 20 cm)があり、その上に五角柱の地神碑が建立されている。そこには



「天照皇太神あまてらすすめおおみかみ當番中、大己貴命・少彦名命・倉稻魂命・保食神うけもちのかみ」の五柱の神様名が刻されている。ここでは春分・秋分の日があつきに川附の人々により祭りが行われている。お祭りでは、祝詞をあげ御神酒と御供をいただいて帰るそうである。

㉒ 正一位最上稲荷神社

(間口 4.1m・奥行 3.1・高さ 5.5m)

川附公民館裏山の 25 段の石段を登ると地元の人が最上様と呼ぶ最上稲荷神社がある。岡山的最上稲荷神社



のご神体をいただき開基したもので、最上位経王大菩薩が祀られている。2年に1回、3月にご神体を持って最上稲荷神社にお参りし、ご神体に性根を入れ替えてもらっている。

祭礼は12月第2日曜日、日蓮宗妙典寺の住職に拜んでもらった後、昔は餅投げをしていたが、現在はくじ引きとお礼にお札とお餅とみかんをいただいて帰ってもらうという。参拝者は主に銅あかがね・野崎地区のざきの氏子である。

建立年は定かではないが、鳥居やたらいいし盥石に明治 41 (1908) 年 11 月とあるところから、この頃にはすでに祀られていたこ



とが分かる。現社殿は昭和 56 (1981) 年 12 月、29 名の信者の寄付により、改築されたものである。

そして、最上様の南東に稲荷神社と日車大王ひぐるま、裏手に荒熊大王あらぐまの小祠が祀られている。



㉓ 山上様

前記の最上様をさらに登ると、山上に小さなお堂がある。堂内にえんのぎょうじや役行者像が安置されている。川附、鳥越武家には、文政 11 (1828) 年 3 月山上堂再建の祈禱札、文政 13 (1830) 年



8 月、神変大菩薩開眼供養の祈禱札、大正 10 (1921) 年 4 月山上堂修繕の祈禱札が伝えられている。現在の山上堂は、昭和 28 (1953) 年 9 月修繕した旨の銘が見られる。野崎・川附の山上講の人達によって祀られ、かつては、旧暦 7 月末頃の夕方、山上様のところで火を焚いて祈禱していた。

現在、お堂はかなり荒廃している。

㉔ 塞の神

(間口 100 cm・奥行 79 cm・高さ 90 cm)

川附から経ヶ丸に登る途中、右に折れ井原町清迫方面行く。左手道下に降り、道路下をくぐると南側にブロック造りの社がある。その中に自然石のご神体が 2 つ並んでいる。これが笹賀地区と清迫地区の



境にある塞の神で、笹賀地区に悪霊が入るのを防ぐ神様である。久安株の人達が毎年草刈りをしてお祀りしている。

㉔ 八荒神社

(間口 3.15m・奥行 2.1m・高さ 3.2m)

塞の神からさらに清迫方面に進むと北側に 14 段のコンクリートの階段、その上にコンクリートのスロー



プの坂道がある。奥に鎮座しているのが八荒神社。社の奥には、棚(間口 180cm・奥行 90cm)が設けられ、そこに小さな祠があり、その中におむすび形の自然石が祀られているのが、ご神体である。そして、その周辺には式年祭のときの御幣がたくさん祀られている。さらに、その右手のブロックで囲まれた基壇の中に、夫婦岩のような自然石 2 つに注連縄しめなわが張られていた。この注連縄は、毎年正月前に総代が掛け替えているという。



八荒神社の氏子は、金鳴・花木・野崎の人々で、式年祭は 12 月に行い、神社で宮司に祝詞をあげてもらった後、場所を移し金鳴あたりの田の中で式年神楽を奉納している。

㉔-1 鬼の足跡

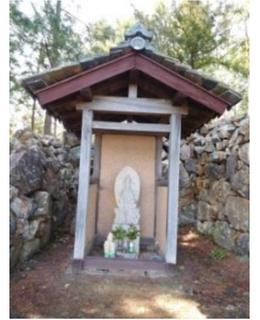
八荒神社の左側の山道を 20m ほど奥に入ると直径 1.5m ほどの半円形をした大きな石がある。この石は昔から鬼の足跡と呼ばれている。石の表面に凹凸があり、これを昔の人は鬼の足跡と想定して名づけたものと思われる。



㉕ 井原西国三十三観音霊場五番観音堂

(本尊葛井寺<大阪>十一面千手千眼観音、間口 1 m・奥行 1.2m・高さ 2.4m)

八荒神社前の山道を南下し、100m 位の所で西に折れ、湿地帯を横切り、そこから観音山に登ると山頂手前に三方を自然石の石垣に囲まれ、南面は出部平野が眼下に見渡せる所にお堂がある。



中には十一面千手千眼観世音菩薩の石像(高さ 75 cm・幅 33 cm)が安置され、台座(高さ 39 cm)に「大坂五番葛井寺」と刻されており、五番札所であることを示している。

ここは毎年野崎の人々がお参りし観音経を唱えている。

㉖ 多田池

経ヶ丸山へ登る途中の字多田後にある多田池は総貯水量約 5000 m³、満水面積 2000 m²、せ



き止め堤防約 35 m の谷池(谷をせき止めて造った池)である。築造年は未定だが、平成 9 年(1997)池の灌漑用水利用農家 5 戸と農林課資料に記載されている。しかし、平成 30 年現在、山火事等の防火用水として活用するのみで灌漑用水としては利用されていない。

㉗ 多田観音堂

(十一面千手観世音菩薩、間口・奥行 210 cm・高さ 360 cm)

経ヶ丸へ行く途中、多田池と経ヶ丸グリーンパークとの中間くらいの所に、南に少し下る道がある。そこ



を 120mほど下ると多田観音堂がある。お堂の奥に中段の棚があり、中央の厨子の中に、木像彩色のご本尊・十一面千手観世音菩薩（高さ 66 cm・幅 32 cm）が安置されている。主に久安株の人々が信仰している。

㉑ **井原西国三十三観音霊場第七番観音堂**

（本尊 岡寺<奈良>如意輪観音）

多田観音堂
の中の左手に
井原西国三十
三観音霊場の
如意輪観世音



菩薩（高さ 71cm、幅 39cm）が安置され、台座（高さ 39 cm）に「大和七番岡寺」と刻されている。

このお堂は平成 10（1998）年 4 月 5 日に建立されたもので、上部に「奉供養十一面観音堂修復願主久安講」とあり、右手には、改築前の宝珠と鬼の瓦が祀られている。その他、「慶応二（1866）年十一月十八日修復」の木札、さらに字が読めない古い木札が 2 枚あり江戸時代から祀られていたことが分かる。そして七番札所の観音様も古老の知る範囲では一緒に祀られており、いつ頃から一緒に安置するようになったか定かでない。

現在も毎年 1 回久安講の人達により道の草刈りを行い、金敷寺の僧侶を招き拜んでもらっている。

㉒ **文学のこみち**

経ヶ丸山頂入口の駐車場脇に自然石に「文学のこみち」と刻された石碑（高さ 135 cm・幅 60 cm）が建っており、背面に「井原市制 30 周年



にあたり、文化協会の発起で文学のこみちを造られることになり、広く市内の文学同好の人たちによる自作の碑が、ここ経ヶ丸林間に建てられたことは、まことに意義深いことであり、このこみちが更に更に延びていくことを願うものである 草木鳥 風土水も 歌奏で 昭和 58（1983）年 3 月 小野強」と刻されている。

平成 29 年 11 月現在、自作の短歌・俳句・漢詩を刻した石碑が、経ヶ丸周辺の山道に 86 基点在し、経ヶ丸散策に訪れる人々の心を和ませている。

㉓ **経ヶ丸讃歌の碑**

経ヶ丸レストハウス南石垣上に、高さ 36 cmほどの平らな自然石を載せ、その上に高さ 1 m・幅 90 cmほどの自然石に経ヶ丸讃歌の歌碑が刻まれている。昭和 59（1984）年秋に井原ライオンズクラブが建立。「経ヶ丸讃歌、見渡す周囲の蒼空の その真ん中の経ヶ丸 上る朝日のかやきに 十里四方が黄金になる」と刻まれている。作詞は矢掛町洞松寺住職で詩人の赤松月船氏である。この歌詞は 1 番だが、歌詞は 4 番まであり、神辺町の八丈けいじ氏作曲の CD も作製されている。



㉔ **宝大神社**

（間口 2.7m・奥行 4.5m・高さ 3.5m）

川附公民館前を左折し少し北に進み、鳥越武氏宅前にある社が宝大神社である。社の中に小さな祠があり、その中に木像の大黒天（高さ 44cm、幅 22cm）が鎮座してい



る。大黒天はもともと仏教守護の神であるが後に飲食の神、農業の神として広く信仰されるようになった。

創建は明らかでないが、宝大神社の鳥居には、寛政十二（1800）年と刻されていることから江戸時代には祀られていたことが分かる。鳥居左手の嗽盥石（手水石）には、嘉永五（1852）年九月吉日惣氏中、同左手の御神燈には「明治三十（1897）年八月吉日若連中二十五名」と刻されている。

祭礼は、かつては笹賀八幡神社の摂社として川附・銅・家後屋と一緒にだったが、現在は10月第3日曜日、川附だけの7ブロックの当番制で行い、午後1時～3時に宮司の祝詞の後、参拝者に御神酒と御饌米、お餅を配っている。

㊦ 荒神社（間口3m・奥行5m）

宝大神社の西側の道を北に100m余り進むと、10段の石段の上に川附の荒神社がある。社の奥の棚に小さな祠があり、御祭神素盞鳴尊すさのおのみことが祀られている。創建は定かでないが、鳥居に「安政六（1859）年己未十月大吉祥日」、右側の御神燈に「安永二（1773）癸巳正月吉日」と刻されていることから、江戸時代の中頃には祀られていたことが分かる。



7年ごとの式年祭は盛大に行われており、宮司のお祓いの後、午後8時頃から、翌日3時頃まで式年神楽が奉納され、その後8時頃から0～7歳までの子供の宮参り、10時からお湯釜行事が行われている。

◎ 荒神社周辺の史跡

㊦-1 荒神社奥小祠群

荒神様の左手奥には、ブロック造りの祠の中

に右から火御碕神社、石鎚神社、木野山神社、丑神神社、秋葉神社と並んで祀られている。かつ



て周辺に祀られていた神社を、一カ所に集めたそうである。

㊦-2 川附虚空蔵堂（川附辻堂）

荒神社の左手前に2.2m四方の辻堂がある。奥の棚の上には木像彩色の虚空蔵菩薩（高さ44cm、幅26cm）



が安置されている。お堂は昭和58（1983）年11月10日、川附から下耕地の氏子により修復されている。

㊦-3 和牛いでみつの墓

（高さ50cm・幅20cm）

多田観音堂に行く途中、道端に和牛いでみつの墓と刻された墓があり、背面に「昭和35（1960）年2月2日也 施主、出原光助」と刻されている。牛供養碑がすたれた後、農耕が牛耕から機械化される過渡期のものと思われる。



㊦-4 多田観音様

辻堂から左奥120mの所に、コンクリートの台座の上に多田観音様と呼ばれる観世音菩薩立像（高さ80cm、幅26cm）が中央に安置され、その後ろに「法界」と刻された石碑、左右に10基



の万人講牛供養碑が祀れている。前に観音堂（間口 310cm、奥行 220cm）があり、老朽化したため後ろに移されたそうである。

③③-5 宝篋印塔

多田観音堂の東側に高さ 280cm の宝篋印塔がある。風化して刻字が読めないが江戸時代のものと思われる。



③④ 石鎚神社

（間口 30 cm ・ 奥行 60 cm ・ 高さ 70 cm）

多田観音堂へ行く道を右に折れ、小山を登るとその山頂付近に川附日之出講の講員が建立した銅板葺きの屋根の石鎚神社の小祠があり、中に石鎚神社と記された木札と家内安全・諸願成就・石鎚神社神護と記されたお札が祀られている。そして小祠から 40 m 下には自然石の御神燈（約 1.4m）が祀られていた。



かつては日之出講総会（旧暦 1 月 24 日）の後と四国石鎚本社参拝後にお参りしていたが、現在は 3 年に 1 度の日之出講春季大祭（総会）の西部当番の時、日之出講員全員で当社と荒神社左手におろされた石鎚神社にお参りし直会をしている。

③⑤ 銅の観音堂

（間口 3.1m ・ 奥行 3.6m ・ 高さ 3.6m）

銅の山際、工場の東側の小路を北に登ると山

腹にお堂がある。お堂の中央に弘法大師作と伝えられる金箔を貼った木造十一面観世音菩薩



坐像（高さ 58 cm、幅 26 cm）、左側に石膏の弘法大師坐像（高さ 24 cm ・ 幅 20 cm 20 cm）、右側に木像の弘法大師立像（高さ 30 cm ・ 幅 10 cm）が、各々厨子の中に安置されている。かつては、銅地区の当番家が檀那寺の住職を呼んで地区全体で拜んでいたが、現在は信奉者が随時拜んでいる。元は、金鋪寺の庵の 1 つであったという。

◎銅の観音堂周辺の史跡

③⑤-1 地藏様と牛供養碑

観音堂の西側に 2 体の石の地藏様（左 1.5m、右 1.8m）が安置され、その周辺に 7 基の万人講牛供養碑が安置されている。



③⑤-2 井原西国三十三観音霊場十一番観音

（本尊 上醍醐・准胝堂 <京都> 准胝観音、間口 1.05m ・ 奥行 1.25 m ・ 高さ 2.7m）

銅観音堂のさらに西側に、観音堂が東向きに建立されており、中に准胝観世音菩薩（高さ 75 cm ・ 幅 33 cm）の石像が安置され、台座（高さ 43 cm）に「京都十一番上醍醐寺」と刻



されていることから、十一番札所であることが分かる。

③⑥ うしとら 丑寅（良）神社



下笹賀鯨地区から経ヶ丸グリーンパークへの遊歩道を少し北に進むと、その東側の小高い所に丑寅神社がある。中央に25段の石段、石段の北側は3段、南側は2段の石段を築き、



途中の平坦地には、植え込みがあり、立派な構えをしている。石段の途中には火袋だけが木製で他は自然石の御神燈がある。境内の周囲は玉垣で囲まれ、ケヤキの丸柱で造られた1間（約180cm）四方の本殿がある。本殿の周囲は幅50cmの回廊と欄干が取り付けられている。

本殿のひさしなどには、龍や獅子、雲形などの彫刻が施され、屋根にも鬼・龍・鷹・天狗などの装飾瓦がふんだんに使われ凝った造りになっている。



これは、石段上部の右側に「嘉永六（1853）癸丑・願主惣中」と刻されており、当時、この地方に不幸な出来事が続いたので素盞鳴尊をお祀りし、鬼門（丑寅＝北東）の方向を鎮めてもらうため下耕地（銅・大橋・鯨・家後屋）の人々が出夫（労力とお金を出すこと）して建立したと伝えられている。

祭礼は、毎年12月第1日曜日、宮司を招き、当番家で拝み、丑寅神社に宮上がりして拜んで

もらっている。

そして神社境内の左手には小さな祠があり、その中に若宮神社・子之権現・十二神社と記された木札が祀られている。

その祠の前の自然石（高さ160cm・幅80cm）に「地神」と刻された地神碑がある。



③⑦ 高平の大仙様

笹賀町鯨から「経ヶ丸」へ登る遊歩道の標高200mの所に大仙様が祀られており地元の人は



「高平の大仙様」と呼んでいる。昭和初期までは、下耕地（銅・大橋・鯨・家後屋）の人々が旧暦9月吉日、全戸一人ずつ出て麓から祠まで道づくりをし、ご祈念後、甘酒をいただき、子供相撲も奉納されていた。しかし、時の流れと共にいつしかお祭り行事も行われなくなった。その後、「経ヶ丸オートキャンプ場」の建設に伴い、元の場所の近くに移転することになり、前の礎石の上に新しく作った石仏をお祀りした。石仏には真ん中に像、右に「大仙王尊」、左に「平成7(1995)年5月建立下耕地」と刻されている。しかし、現在は礎石のみ残っている。

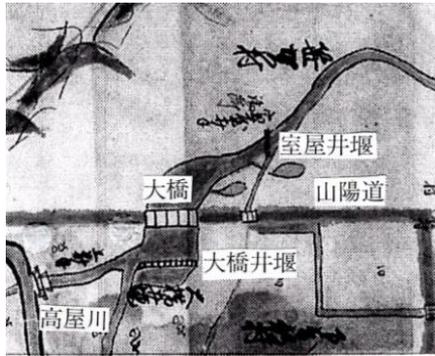
③⑧ 旧山陽道備中大橋跡の碑

（高さ1m・幅21cm・平成6年3月設置）

現在、井原歯科クリニック北の四差路に出部いにしえ会によって旧山陽道備中大橋跡の石碑が建立されているが、昔はここに橋が架かっていた。江戸時代旧山



陽道がこの川を横切っており、川上に^{むろやいぜき}室屋井堰、川下に大橋井堰があって川の



の水は田畑の灌漑用水のため、せき止められていた。そのため、旧山陽道の通る所には、飛び石が置かれ、人々はこれを大橋と呼び渡っていた。^{みずかさ}水嵩の多い時は大変困り交通の難所であった。

(絵図参照)

なぜこのような井堰ができたかという、高屋川は天井川で水量が少なく、高屋村・下出部村・笹賀村の農家は、この川の水を利用しており、日照りの時には度々水争いの起きた場所であった。高屋に水を送った証拠に今でも高屋川の下を通る水路が残っている(写真参照)。



明治以降、木の橋が架けられ、その後鉄筋コンクリートの橋が架けられていたが、今は道路となり水路は区画整理により^{そっこう}側溝や^{あんきよ}暗渠となり、昔の様子は見る影もない。



㊸ 大師堂 (間口 120 cm・奥行 170 cm・高さ 200 cm)

高屋大橋から北へ後月橋方面に行くと、家後屋から後月橋方面に行く道との交差した所から、少し西に進んだ北側に小さな大師堂がある。中に 3



体の石のお大師様 (前 60cm の大師坐像・後右大師坐像 100cm・後左大師立像 140cm) が安置されている。



大師堂の左前に 8 基の万人講牛供養碑、右前から奥に古いお地藏様 9 体と、江戸時代 (中に明治・大正期のも混じる) の古いお墓 11 基が並んでいる。

江戸時代、家後屋は警固屋と呼ばれ、西からの不法侵入者の見張り場があり、ここで行き倒れになった旅人を葬ったお墓ではないかと言われている。

㊹ 塞の神

大師堂からさらに西に進むと後月橋から約 30 m 手前の家と家との間の奥まった所に大きな岩があり、その前方左側の憤怒の姿をした石像 (高さ



58 cm・幅 30 cm) が塞の神と思われる。中央がお地藏様の石像 (高さ 35 cm・幅 18 cm) 右側にお地藏様の形をした石像 (高さ 23 cm・幅 20 cm) が祀られている。

この塞の神は、村への^{あくりょう}悪霊の侵入を防ぎ、道行く人を災難から守るため、高屋村と笹賀村の村境に祀られたものである。

下出部編

下出部は、江戸時代下出部村と言ひ山陽道に沿って形成された街村で、上出部村と共に古代出部郷（和名抄）の遺称地である。文政13（1830）年の後月郡村様子書（安田文書）によれば「石高629石余・家数88・人数311・牛10・馬4」と記されている。

また、下記山陽道絵図（山口県文書館所蔵行程記より）を見る、下出部山陽道東端に一里山（一里塚）が描かれ、赤線の先に「備後尾道ヨリ八里（32km）、備中板倉ヨリ九里（36km）」少し西に進むと妙見石2個が描かれ、これは現在もある題目碑のことである。その西隣に高札場が描かれ、赤線の先には「此札場枚数3枚、1枚捨高札（お尋ね者）・1枚暇名切支丹札・1枚忠孝札」と書かれている。その南には常福寺（現常福廃寺跡の墓所）や観音堂が描かれている。大曲には薬師（現



薬師堂）と共に石の道しるべまで描かれ「此指標=右九州道左作道」と記されている。また出雲池のところに池が描かれ、その横に出雲大明神が記されている。これにより江戸時代にはここに出雲大明神が鎮座していたことがわかる。

① 一里塚跡 (高さ 118cm・幅 67cm)

旧山陽道出部郵便局より、約 100m西の北側に「旧山陽道一里塚跡」の石碑が、平成 4 (1992) 年 5 月吉日、出部いにしえ会によって建立されている。一里塚は江戸時代初期の



慶長 17 (1612) 年大久保石見守が奉行の頃、主な街道の 1 里 (約 4 km) ごとに道の両側に盛土をし、榎や松を植えさせ、旅人に道のりを知らせ休憩の場としたのが始まりといわれている。

下出部一里塚は、道をはさんで南北に約 4 mほどの盛土をし、南側に榎、北側に松が植えられていたが、榎は明治時代に枯れ、松は大木になり交通の妨げになるので昭和 24 (1949) 年頃、取り除かれた。



今も東は東江原町青木に、西は福山市神辺町上御領に「旧一里塚跡」の石碑が建立されている。

② 土手井筒

一里塚から旧山陽道を西に 70mほど進み、そこから南に 10m行くと土手井筒ポンプ室 (4.15m × 3.15m) がある。中には直径 2mほどの井筒が掘ってある。大正～昭和の頃は石垣の井筒であったが、市の補助を受け改修した。平成 29 年現在 8 戸の農家が灌漑用水として利用している。



③ 伊達大蔵の墓 (高さ 63 cm・幅 30 cm)

土手井筒から旧山陽道に戻り、10mほど進み、小路を北に 50mほど進むと小さな墓地がある。その奥に白色粒状石灰石 (大理石の一種で、風化して米粒状になり小米石ともいう) でできた古い



宝篋印塔があり、戸木荒神山城主・伊達大蔵の墓と伝えられている (わがまち出部 P 31~33、P 84~85 参照)。その奥に、出部いにしえ会により「戸木荒神山城主伊達公墳墓、平成九年十月吉日」の石柱 (高さ 138cm・幅 17cm) が建立されている。



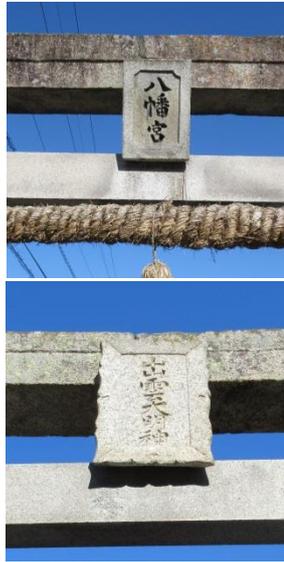
④ 下出部八幡神社



旧山陽道を西に 100mほど進むと道路北側に大きな鳥居 (正徳六 <1716> 丙申天二月吉日) があり、その前には左右に大きな阿吽の狛犬「昭和七 <1932> 年山本達太郎奉献」が鎮座している。そこから約 80 m



の参道を進み、神社の簡易鳥居・隨身門と出雲神社の鳥居をくぐると、下出部八幡神社の拜殿・幣殿・本殿のある境内に入る。



この下出部八幡神社は貞観2(860)年8月、上出部・下出部・笹賀・敷名・高屋の5カ村の協力により勧請された。当初は少し西の宮地(大曲公園付近)に鎮座していた。正徳元(1711)年現在地に奉遷され、宮原の地名をとって宮原八幡宮と称していたが、明治元年下出部八幡神社と改称された。主祭神は応神天皇・神功皇后・三女神である。その後、大正4(1915)年10月、出雲池のところに鎮座していた出雲神社(祭神は**大物主命・三穗津姫命**)を合祀した。そのため、隨身門には左右それぞれ2神の像が祀られ、出雲神社の鳥居も併置されているのである。



現在の氏子は下出部一帯で、かつて祭りは10月17日・18日だったが、現在は10月第三日曜日とその前日となった。宵祭りには神楽が奉納され、昼祭りには、下出部子供会が神輿や千載楽を繰り出し祭りを盛り上げている。

◎下出部八幡神社境内社

④-1 菅原神社(天神社)

(間口 57 cm・奥行 84 cm・高さ 157 cm)

境内の西側にあり、菅原道真公を祀る学問の神様。



④-2 稲荷神社

(間口 38 cm・奥行 42 cm・高さ 80 cm)

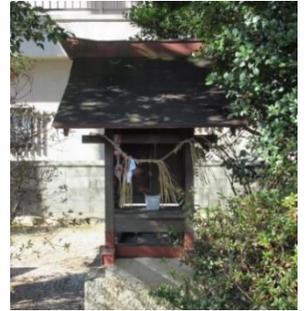
菅原神社の北にあり、倉稲魂神を祀っている。



④-3 荒神社

(間口 41 cm・奥行 56 cm・高さ 80 cm)

下出部八幡神社の北にあり、素戔鳴尊を祀っている。病気や災難から産子を守る神様。



④-4 龍王様

北東の隅の石の上に陶製の社が置かれているのが龍王様(雨乞いの神)で、元は大曲に鎮座していたのをここに遷座したそうである。



④-5 地神碑

(高さ 140 cm・幅 80 cm)

境内東側に高さ 50 cmの自然石の台座の上に「地神」と刻された自然石の地神碑がある。

これは五角柱の地神碑と同じものである。

そしてその横に昭和 34(1959)年玉垣建設協賛者の芳名を刻した記念の石碑(横 157 cm・縦 111 cm)も建立されている。



⑤ ^{すげた}菅田井筒

国道313号線沿いの日興サービスガソリンスタンドの東の道を10mほど南



に進み、そこから少し西に進むと大福運送の西隣に菅田井筒がある。大正～昭和初期にかけて井戸を掘り、周囲に石垣を築き湧水を汲み上げ、戦前は10haの水田を潤していた。揚水方法も当初は水車で、その後発動機へと変遷していった。

現在の菅田井筒は、市の補助を受け改修され、コンクリートの貯水池(6m×4.5m)の上にポンプ小屋(3m×3m)が設置されているが、水田の宅地化が進み、平成29年現在、10戸の農家がこの灌漑用水を利用しているに過ぎない。

⑥ 小塚荒神社

(間口70cm・奥行78cm・高さ150cm)

下出部八幡神社の鳥居前から、旧山陽道を西に80mほど進むと、南側の空き地の東端に



大きな2本のえのみ木があり、その前の石垣

の基壇の上に、銅板葺の小さな社がある。これが小塚荒神社(小塚は小字名)である。社の下部にお飾りの蛇が巻き付いているので別名へび荒神とも言われている。氏子は65軒。



元々戸木荒神社の氏子であったが、江戸中期に分かれてここに祀るようになったという。(鳥居に安永甲午三<1774>年十月・御神燈に文化乙丑二<1805>年十月と刻

されていることからこの頃と推察される)

7年毎の式年祭には、宮司の祝詞に続き、式年神楽が奉納される。

⑦ ^{りていひょう}道標(里程標)(縦・横15cm、高さ72cm)

小塚荒神社境内の手水鉢の傍の旧山陽道側に石の道標があり、その南面に「明治拾四(1881)年五月一日」と



建立年月日が刻され、東面に「距高屋管轄廿六町(西の高屋町の県境まで26町<約2800m>)」、北面に「距岡山元標拾参里(東の岡山元標<岡山市橋本町>まで13里<約52km>)」、西面に「距三石管轄地廿三里十四町(東の県境三石まで23里14町<約107km>)」と刻され、明治時代の貴重な道路標識である。このような道標は、井原町向町の旧道の中ほどにもある。

⑧ ^{ふなやとう}舟夜燈(舟の長さ240cm・夜燈の高さ230cm)

道標より旧山陽道を西に200mほど進むと、北側に3m四方の石垣の台座(東側に4段の石の階段がある)の上に、舟夜燈と呼ばれる珍しい常夜燈が建立されている。そして竿の



部分に「吉備津宮・金毘羅宮・瑜加権現・献燈」と刻され、裏面に「文政九戌(1826)十月」と建立年が刻されている。

これは標記神様への信仰と、舟型は四国金毘羅参りをする人たちの船旅の安全を祈って建立されたと言われている。

⑨ ^{だいもくひ} 題目碑

舟夜燈から西に旧山陽道を70mほど進むと、北側に長方形の敷地(4m×2.5m)に2基の



題目碑が並んで建立されている。いずれも2段、3段の台座の上に高さ約170cmほどの石碑が並び、各々に日蓮宗で唱えられるお題目「南無妙法蓮華經」が刻されているので題目碑と呼ばれている。また、書体が龍の髭のように左右に勢いよく伸びていることから、俗に「髭題目」とも呼ばれている。

西側の題目碑側面に「奉往詣三千ヶ寺供養」、東側の題目碑側面に「妙法尊題三千部修行供養」と刻まれていることから、日蓮宗の寺院に度々お参りし、供養を重ねられた厚い信仰心の方の建立と推察される。

⑩ ^{おおまがり} 大曲薬師堂 (でんぐら堂)

(間口2m・奥行2.5m・高さ3.4m)

大曲公園の東端に薬師堂がある。ここは昔、薬師庵といい江戸時代まで新之坊の末寺であったが、明治6(1873)年10月、無檀・無



住のため廃寺となった(後月郡誌)。その後、土地区画整理事業のため敷地も狭くなり往時の姿は残されていない。

ここでは、関ヶ原の戦いで手柄を立て、のちに福山城主になった水野勝成公の逸話(わがまち出部P86参照)に基づき、でんぐら堂とも呼ばれている。

現在の大曲薬師堂は、昭和30(1955)年に下出部町常福廃寺跡に残されていた鐘つき堂

を移築したものである。お堂の正面中央の2段の台座の上に、梵字の「あ」の下に薬師如来と刻されたご本尊の石碑(高さ43cm)が安置されている。

⑪ 井原西国三十三観音霊場十二番観音堂

^{いわまでら}〈本尊岩間寺(滋賀)千手観世音菩薩、高さ75cm・幅37cm〉

薬師堂の左手には・本尊岩間寺(滋賀)千手観世音菩薩が、台座(高さ41cm・幅33cm)の上に安置されている。



右手には地藏菩薩(高さ95cm・幅29cm)が安置されている。

⑫ 旧山陽道大曲跡

大曲薬師堂の南側に、旧山陽道大曲跡の説明版(横135cm・縦89cm・高さ190cm)が平成6年(1994)9月井原



市によって設置された。

そこには、出部いにしえ会が絵地図と共に次のような説明文を記している。「旧山陽道には、単調な旅に変化を付けるため、一里塚と共に大曲がつくられた。戦乱の世には東西に走る敵の数を調べるのに大変都合が良く、また参勤交代の時代には駕籠を止め行列を眺めては長い旅を続けていたという。地域の人々に親しまれた大曲も、新しいまちづくりによる土地区画整理事業で姿を消した。注：大曲とは「日葡辞書」によると街道で2か所大きな直角の曲がりがあるとある。たしかに絵地図のような大曲は区画整理により姿を消したが、南端の大曲と北端の腰折地藏のある所を地図上で結ぶと、当時の大曲の様子を想像することができる。

◎大曲跡周辺の史跡

⑫-1 道しるべ（2基）と水準点（水準標石）

大曲跡の説明板の東側に「水準点・1607号」と刻された水準標石（縦・横各20cm・高さ56cm）が埋設されている。これは主要道路2kmごとに置かれ土地の高さを測る基準点を示すものである。



水準標石と並んで、道しるべの石碑（縦63cm・横21cm・高さ60cm）があり、手の印の下に「右上かた道（京都・大坂道）・左さく道（農道）」と刻まれている。



そして、その少し南西方向に「右きゅうしゅう・左さくかた道（農道）」と刻まれた道しるべ（高さ64cm）がある。後者は、標記行程記の山陽道絵地図の大曲のところに薬師堂と共に記載されている。

⑫-2 いやのもと 井屋元水源

現在大曲説明版の南にある井屋元水源は貯水池（8.5m×4.5m）の上にポンプ室（3m×4m・高さ3m）を備



えた施設で、平成15（2003）年頃建設されたものである。ここから300m東の旧山陽道沿いにあった井屋元井筒が古くなったので埋め立てられ防火用水池となり、そのかわりに利用農家4戸のために灌漑用水施設として建設されたが、現在は他の用水路の水を利用しているため、この施設は使用されていない。

⑬ 腰折地蔵

（間口190cm・奥行250cm・高さ220cm）

旧山陽道大曲の直角に曲がる北端の角にあるのが腰折地蔵である。2段の石垣の上に平らな自然石（1m四方・厚さ25cm）を置き、その上に四方流れという上品な銅板葺きの屋



根の小さなお堂がある。（堂宇再建明治二十三年<1890>八月吉日、屋根銅板葺き替え昭和四十九年<1974>十月）その中央に少し傾いた大きな石仏（高さ26cm・幅25cm）が腰折地蔵である。



これは戦国時代末期（今から450年ほど前）戸木荒神山城主伊達大蔵の娘、新姫が、敵に追われ城から逃げる際、断崖を飛び下り腰の骨を折って死亡した。村人が哀れに思い大曲のたもとに安置したのが、腰折地蔵と言われている（詳細は、わがまち出部P84～85参照）。

腰折地蔵は、腰痛・安産にご利益があると、多くの人々の信仰を集めるようになった。お堂の中には他のお地蔵様やいろいろなお供え物があるが、これらは大願成就の際に納められたそうである。

かつては、旧盆の23日の縁日に接待が行われていたが、今は接待はない。

⑭ こんびらぐう 金毘羅宮

（間口1.8m・奥行1.7m・高さ3m）

高屋大橋から高屋川沿いに北に進み、後月橋方面に行く道と家後屋方面へ行く道の三差路の

ところに、四国金毘羅大権現の分霊をお祀りした金毘羅宮の小祠がある。



もともと四国の金毘羅宮は、航路の安全を守る神様であるが金の字があることから、財産形成の神として庶民の間で広く信仰されてきた。

現在の小祠は昭和 30 (1955) 年頃、この地に生育していた大きな榎の木を伐採製材して建立された。

金毘羅宮の祭礼は、昭和 30(1955)年頃までは、宮司の祝詞に続き神楽も奉納され、お餅やお菓子の接待もあり、とても賑わっていたが、その後は行われていない。



金毘羅宮の東側に高さ 3 m もある立派な常夜燈が明治 25(1892)年 1 2 月に建立されている。

⑮ 出雲池

リフレッシュ公園の北側にある出雲池は出部地区で一番大きな谷池(谷をせき止めて造った池)である。



貯水量は 14000 m³、満水面積 16000 m²、せき止め堤防約 141m、平成 2 年当時の灌漑用水の利用農家 50 戸と農林課の資料に記載されている。また、下出部検地帳かんぶんに寛文 3 (1663) 年、「出雲池新池床成る」との記載があり、江戸時代初期には作られていたことが分かる。

平成 2 年から 3 年がかりで行われた出雲池大改修では、堤防内の止水壁のブロック化や斜樋の改修等が行われ、平成 5 (1993) 年 3 月、出

雲池改修記念碑 (横幅 180 cm・高さ 100 cm・自然石) が道路脇に建設されている。その後、宅地化が進み池の灌漑用水利用農家の減少に伴い、南部を 3 分の 1 ほど埋めてリフレッシュ公園とした。平成 30 年現在池の灌漑用水利用農家は 10 戸となっている。



⑯ 岩崎山

出雲池の西側にある高さ 100m ほどの岩崎山は、鶴の飛来する名勝地で、皇室とも深いつながりがあった。

天皇が即位後、最初に行う新嘗祭を大嘗祭いになめさい だいじょうさいと言い、特別に悠紀殿ゆきでん(東)・主基殿すきでん(西)といわれるお社を設け、そこに天皇が新米を皇祖天照大神こうそあまてらす おおみかみ あまつかみ くにつかみ・天神・地神に奉納する最大の神事が行われた。そして主基殿に献上する新米は、主基田うらない たんぼで栽培されるが、それは占いによって丹波の国(京都府中部)と備中国(岡山県西部)が交代で行うことが決められ、下出部地区も献上地に選ばれていた。そして献上の際、その土地の名所が歌に詠まれる習わしがあり、献上の際詠まれた次の和歌 2 首が続後撰和歌集しよくごせんわかしゆうに記載されている。

・岩崎の山にむれいるまなづるの けふ(きょう)こそ御代のはじめなりける「永承元(1046)年 主基の方 岩崎の歌 藤原朝臣家経」



・末遠き千代のかげこそ久しけれ まだ二葉な岩崎の松 「仁治三(1242)年

主基の風俗の歌前中納言経光^{さきのちゅうなごんつねみつ}」

この歌碑（横幅 290 cm・高さ 100 cm・平成 12（2000）年建立）は、名勝岩崎山の石柱（幅 21 cm・高さ 93 cm・平成 6 年 3 月建立）と共に、出部にしえ会によって出雲池のたもとに建立されている。

⑰ 常福廃寺跡

井原線いずえ駅より西方約 400 m 先の南側にたくさん墓地がある。これが常福廃寺跡である。



常福寺は、江戸時代の「備中後月郡下出部村明細帳」^{ぶんせい}（文政12 年〈1829〉・調）によると、高屋村高山寺の末寺で本堂（5.4m×5.4m）、庫裏^{くり}（3.6m×5.4m）、鐘撞堂^{かねつきどう}（1.8m×1.8m）を有する寺であったが、無檀・無住の寺の廃止令に基づき、明治 6（1873）年 10 月廃寺となった（後月郡誌）。梵鐘は、昭和 18（1943）年 5 月、第 2 次世界大戦のため供出され、鐘撞堂は、大曲へ移転改築され、薬師堂（でんぐら堂）になっている。

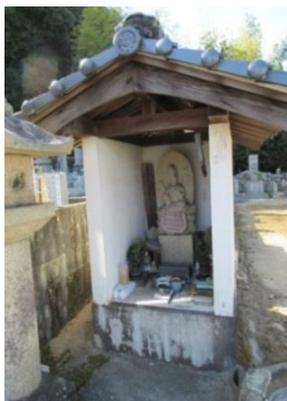
この常福廃寺跡には貴重な史跡が残されているので次に記す。

⑰-1 井原西国三十三観音霊場十四番観音堂

（本尊 ^{みいでら} 三井寺<滋賀>如意輪観音、間口 1 0 2 cm

・奥行 1 2 0 cm・高さ 1 9 0 cm）

常福廃寺跡の入口西側に東向きに建つブロック造りのお堂が 1 4 番観音堂で、中央の台座（高さ 3 4 cm）の上に如意輪観世音菩薩（高さ 77 cm・幅 37 cm）が安置されている。左右に小さな石の地藏様が 1 体ずつと弘法



大師の石膏像が 2 体ずつ安置されている。そして左手前には、常夜燈（高さ 1.8m）、右手前には手洗石（45 cm×45 cm）がある。

⑰-2 曼荼羅石碑（光明真言塔）

（高さ 115 cm・幅 52 cm・自然石）

十四番観音堂より少し高い所に四基の古い石碑が並んでいる。その一番西（写真中央）にあるのが、



曼荼羅石碑である。円形の中心文字は（梵字の^{ぼんじ}アで胎蔵界大日如来^{たいざうかいだいにちによらい}を示す）、周囲文字は梵字の光明真言の 2 4 文字が刻されており、下部に蓮の花の模様が刻されている。手前側面に「宝永四（1707）丁亥^{ひのとい}八月^{ちゅういん}中院^{ゆうしん} 宥心」と奉納年月日と奉納者名が刻されている。

⑰-3 行者碑（高さ 136 cm・幅 49 cm・自然石）

曼荼羅石碑の少し東に「文政九（1826）天丙戌九月吉日奉納^{おおみね}大峯三十三度禮（礼）^{ひのえいぬ} 施主 森谷庄□（□判読不能）の石碑がある。森谷氏が大和大峯山に 3 3 回登拝した記念に建立したものと思われる。



⑰-4 大乘妙典供養碑（高さ 116 cm・幅 64 cm）

行者碑の東に、全ての衆生^{しゅじょう}を救済して仏陀の境地にまで導くという法華経の教えを説いた大乘妙典供養碑に「宝曆十（1760）年庚辰七月十六日 梵字（ア）奉妙教大乘妙典日本□、行者 當□□西敬白」と刻されている。



⑰-5 十八基の大型五輪塔

常福廃寺跡の少し高い所に高さ1m以上の大型五輪塔12基、さらにその上の段に6



基の五輪塔が並んでいる。これらは宝永元（1704）年～天保元（1830）年のもの13基、古く年代が判読できないもの4基、明治2（1869）年のもの1基である。江戸時代から明治初期にかけての相当身分の高い人のお墓と思われる。

また墓地内には、鎌倉・室町時代と思われる白色粒状石灰岩（小米石）の五輪塔が数多く散在しており古い墓地であることがわかる。

⑰-6 宝篋印塔（高さ2.7m）

常福廃寺の一番奥の南東部にあり、建立年、「明治十（1877）年^{うし}丑二月、建立者、大阪・六十六部（全国六十六ヶ所の霊場をめぐ^{あんぎゃ}る行脚僧）十名」と刻まれている。



⑱ 岩屋観音

井原線いずえ駅を少し西に進むと「岩屋観音院（通称・子安観音・毎月第2日曜日・お祭り）」と記された看板が建てられている。このことからかつては安産を願う人達が多くお参りしたと思われる。看板の所を南に折れ登山道を登ると、途中で信者の奉納した石仏が点在しているのが目につく。また登山道わきの谷からは清水が流れており、戦前までこの水を飲むと乳が出ると言い乳の出ない人の信仰が厚かったという。

⑱-1 岩屋十一面観音堂

（間口3.6m・奥行6.3m）

山の8合目位まで登ると平らな所があり、ここに標記の観音堂がある。正面上部に「岩屋十一面観世音」と墨書された看板が掲げられ、堂内の奥中央の祭壇に十一面観世音菩薩など4体の仏像が安置されて



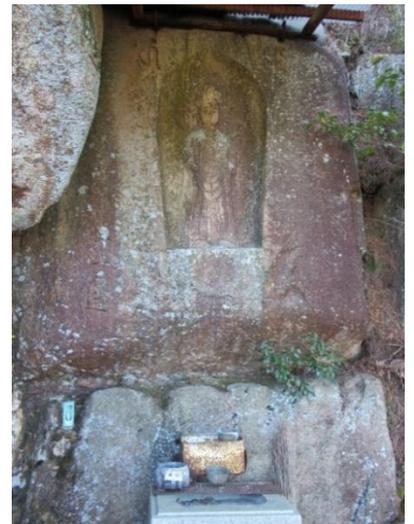
いる。また天井には大願成就し奉獻された提灯や千羽鶴などが数多く吊るされている。

お堂の前には般若心経^{はんんにゃしんぎょう}を刻した石碑（横幅49cm・高さ107cm）が台座の上に建立されている。

⑱-2 岩屋十一面観世音磨崖仏

（高さ116cm・最大幅107cm）

観音堂を東に30m位進むと大岩に、高さ150cm・横幅75cmの窪みを彫り、その中に標記の磨崖仏が浮き彫りされ、井上石造と製作者名が刻されている。



これは昭和初期元庄屋山足家の祖母を中心に7人ほどが観音講を組み、熱心に信仰し磨崖仏を奉獻したといわれている。おそらく、昭和9年10月に参道に石仏を奉納している山足政代・田中豊野・高橋小波・山本シツノ・山足亀代・山足常の各氏ではないかと想定される。

また磨崖仏の前には岡山市の斉藤教男・ミサ

コ氏が、昭和 44 (1969) 年 3 月 17 日に石の線香立 (縦 40 cm・横 60 cm・高さ 90 cm) を奉納している。このことから井原市だけでなく広範囲から信者がお参りに来ていたことがわかる。

⑱-3 岩屋観音奥の院

磨崖仏まがいぶつの東の岩と岩との間に小さなお須屋すや (幅 30 cm・高さ 40 cm) があり、その中に顔の背面に後光がさす小さな観音石仏 (高さ 30 cm・幅 20 cm) が安置されている。これが岩屋観音である。開基は正徳 2 (1712) 年 3 月 18 日と言われている。また、その前に建立された常夜燈 (高さ 1.8m) の竿の部分に御来迎観音と刻されており、建立年も「寛」以外判読不能だが、江戸時代のもものと想定される。御来迎観音の姿が奥の院の岩屋観音と酷似していることから、奥の院の観音様は御来迎観音菩薩ではないかと思われる。以前は奥の院の下におこもり堂もあったが、崖崩れで倒壊したという。

冬至には、大きな鍋にかぼちゃ・野菜・団子のお汁の接待が行われていた。これをいただくと風邪を引かぬと



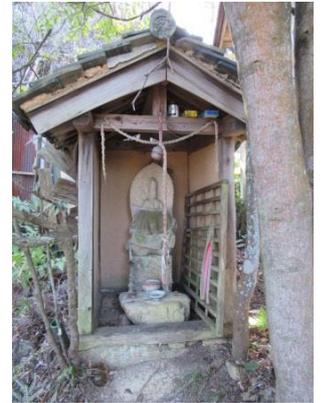
いわれ、井原方面からも多くのお参りがあった。接待も最初は奥の院で、次に岩屋観音堂で、その後は下の庄屋の家で、最後は観音様の下の家で行われていたが、昭和 30 年頃 (1955) で接待も中止になった。

⑲ 井原西国三十三観音霊場十三番観音堂

(本尊 石山寺いしやまであら<滋賀>如意輪観音、

間口 100 cm・奥行 91 cm・高さ 190 cm)

岩屋十一面観音堂の東側に観音堂があり、その中に十三番と刻された高さ 44 cm の石の台座の上に、如意輪にょいりん観世音菩薩かんぜおんぼさつ (高さ 75 cm・幅 35 cm) が安置されている。



⑳ 石鎚神社

(間口 130 cm・奥行 100 cm・高さ 190 cm)

十三番観音堂の上方にある細道を東に 40m ほど進むと、5 段の自然石の石段があり、その前の大きな岩の上に銅板葺き屋根の社がある。その中に石の社 (間

口 70 cm・奥行 40 cm・高さ 100 cm) があり、その中に鉄製のご神体 (約 20 cm) 3 体が鎮座している。これが石鎚神社である。前にはステンレス製の口ウソク立てと賽銭箱が置かれている。

講員 30 名前後、春秋 2 回、彼岸中日に石鎚神社の祭典を行う。昭和 30 年 (1955) 頃まではツキコウやぎとうと称し、毎月 1 回夜祈祷をしていた。

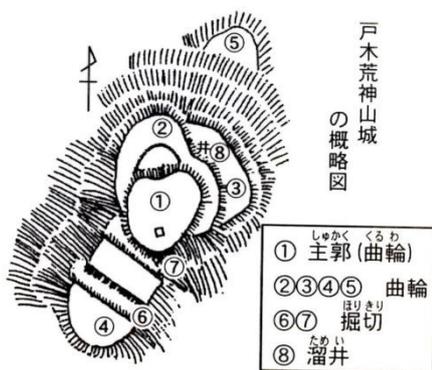


と き こうじんやまじょう
 ②① 戸木荒神山城跡



井原鉄道いずえ駅の真南に、地元の人が出部富士と呼ぶ標高 120mほどの美しい小山がある。その山頂周辺が戸木荒神山城跡である。

いずえ駅前を 40mほど西に進むと登山道に出る。登山道はよく整備され登り易い。急な登山道を南に進むと三差路に出る。さらに東に進むと堀切の跡があり、それを越えしばらく登ると山頂に着く。そこが戸木荒神山城の主郭（曲輪）跡で、東西 24m・南北 10mほどの平地が広がっており、「戸木荒神山城跡」（平成 6 年 3 月 建立・出部いにしえ会）の石碑（高さ 95 cm・幅 21 cm）が建立されている。この頃、同会や下出部自治連合会・下出部子供育成会な



どの協力で桜の木が植えられている。

この城は、鎌倉時代に長田庄司忠致が城主となり、16世紀半ばの戦国時代には、伊達大蔵が城主だったが、高越城主 伊勢長左衛門尉長盛との合戦で敗れ滅亡したと備中府誌に記されている。（詳細は、わがまち出部 P 31～33 参照）

さんじょうさま
 ②② 山上様

（間口 135 cm・奥行 165 cm・高さ 220 cm）

戸木荒神山城跡山頂中央に山上様の木造の社があったが、老朽化したため、鉄骨プレハブ造りの社に改築された。平成 17 (2005) 年 3 月 21 日、宮司を招き盛大な落成式が行われた。祭壇の中央には山上様と称されるえんのぎょうじや 役行者の石像（高さ 58 cm・幅 48 cm）が祀られている。



昭和初期までは、5～6人で山上講が行われていたが、戦時体制となり中止になった。現在は地区住民約 30 名が春の花見の頃、山上様にお参りし祝宴を開いて懇親を深めている。

さい かみ
 ②③ 塞の神

戸木荒神山城跡へ登る途中の三差路の南側の山道を 80mほど行くと山桜の木に「塞の神（山城



260m)」と記された標識があり、その下に素焼きの祠が祀られている。これが塞の神である。祠の後ろに大きな榎の木があり、御神木として

しめなわ
注連縄が掛けてある。ここはかつて下出部村と大江村の村境にあたり、村に入る悪霊あくりょうを防ぐために祀られたものである。



②④ **戸木荒神社** (間口 4 m・奥行 3.1m)

つるまき
弦巻公園より少し西の下出部町迫田に鎮座する戸木荒神社は、突風により境内の松の太木が倒れ神社が倒壊したため昭和29(1954)年12月26日再建され、宮司を招き正遷座祭が盛大に行われた。



社殿内の正面には木製の社(間口 96 cm・奥行 54 cm・高さ 110 cm)があり、中に祭神素戔鳴尊すさなみの三面六臂むつむでの憤怒像ぶんとぞう(高さ 40 cm・幅 23 cm・木像)が祀られている。両サイドには珍しい木の燭燈しよくとう(明治二十一年<1888>年十一月祥日)が奉納されている。神社前には高さ 2.8mもある自然石の御神燈ごじんとう(明治十三年<1880>年かのえたつ庚辰九月二十八日)が奉納されている。



神社設立年代は不詳だが「荒神社当番諸式入用帳」の記録は、弘化3(1846)年から始まっており、江戸時代後半には鎮座していたことが分かる。

神社再建等は合同で行われるが式年祭や荒神講などは、下出部地区11軒と上出部吉岡株9軒が別々に行っている。これは戸木荒神山城とのかかわりによるのではないかとされている。



式年祭は、下出部の1年後に上出部が行い、荒神講は下出部は春秋年2回行い、上出部は秋に1回行っている。

②⑤ **正一位稲荷神社**

(間口 33 cm・奥行 45 cm・高さ 83 cm)

つるまき
弦巻公園の中を通り抜け、山道を少し南西方向に登ると大きな岩の前に基壇を築き、その上に正一位稲荷神社の小祠が祀られている。前には大きな赤鳥居があったが、腐食のため倒され、近く再建の予定という。



大祭は5月上旬、戸木荒神社下出部地区氏子11軒によって実施している。以前は全て神前で行われていたが、現在は神前でなおり拜んだ後、戸木荒神社境内で直会なおりをしている

古墳編

出部地区の弥生時代から古墳時代にかけての遺跡をみると、山王台地開発事業に伴う発掘調査（平成12～13年度）で、草足塚西遺跡くさたりづかにしや権現ごんげん平遺跡びらで弥生時代後期（3世紀ごろ）の竪穴式住居跡が発掘され、草足塚東遺跡からは、弥生時代中期（2世紀ごろ）の竪穴を掘り遺体を埋葬した土壙墓群どこうぼぐんが発掘されている。

また、弥生時代末期（3世紀末）には、豪族の墓といわれる金敷寺裏山墳丘墓ふんきゅうぼをはじめ、古墳時代前期（4世紀）・中期（5世紀）の竪穴式石室せきしつを持つ古墳や後期（6～7世紀）の横穴式石室を持つ古墳の遺跡が、31基（市内最多）も発掘されている。さらに古墳周辺の畑などから、弥生時代から古墳時代にかけて使用されていた弥生式土器片・土師器片・須恵器片・石包丁・鉄器・鉄滓てつきい（鉄を製錬した時にできるくず）などの遺物が数多く発掘されている。

これらの遺跡・遺物が存在することは、出部地区に弥生時代にはすでに稲作などを行う集落があり、古墳時代には、その集落を支配する豪族が輩出されていたことを物語っている。

七日市町の古代遺跡

① たぬきはら 狸原1号墳

七日市町東端の井原トンネル西入口上の字狸原に、古墳時代後期の横穴式石室があったが、昭和40（1965）年頃破壊された。出土品、須恵器片。

② 狸原2号墳

1号墳より少し東の山腹にあり、横穴式石室（石室長約6.8m・奥壁幅約1.6m・奥壁高約1.3m・天井石1枚）を持つ、直径約15mの古墳時



代後期の円墳である。

③ むりょうじ 無量寺1号墳

現在は道の石垣になっているが、以前は石室があったといわれている。

④ 無量寺2号墳

1号墳のそばの畑の中から発掘され、現在、古代まほろば館の芝生の中に移設されている。竪穴式石室（石室長1.7m・石室幅0.6m・石室高0.3m）を持った古墳時代前期の古墳。



⑤ やまなま 山間1号墳

七日市から天王坂を通り花野に抜ける山道脇にあり、横穴式石室（石室長2.4m・奥壁幅約1m・奥壁高約1m・天井石1枚）を持つ古墳時代後期の古墳。出土品、須恵器片・鉄滓。



⑥ 山間2号墳

1号墳より少し北の西奥にあり、横穴式石室（石室長5.5m・奥壁幅約1.3m・奥壁高約1.2m・天井石4枚）を持つ古墳時代後期の古墳。出土品なし。



⑦ うしろやま 後山古墳

七日市町南部名越坂なごえを登ると東側の字後山の山腹に横穴式石室（石室長5.8m・奥壁幅約1.5m・奥壁高約1.5m・天井石4枚）を持つ古墳時代後期の古墳がある。出土品なし。



⑧ ^{じぞうびら}地蔵平古墳

山王バイパス道路の頂上手前の東側の字地蔵平に出部地区最大の横穴式石室



(石室長 7.9m・奥壁幅約 1.8m・奥壁高約 2.2m・天井石 3 枚) を持つ古墳時代後期の古墳である。以前、権現平古墳と表示されていた。出土品なし。

⑨ 東大谷 1 号墳

井原消防署敷地内にあり、当地に消防署を移転に伴い平成 10 年発掘調査が行われた。



墳丘直径約 10m の円墳で、墳丘中央部に横穴式石室 (石室長 4.3m・奥壁幅約 1.7m・奥壁高約 2m・天井石 2 枚) を持つ古墳時代後期の古墳である。石室内には棺の台石と思われる石材が遺存していた。副葬品として、有力豪族の墓から出土するのが一般的な金銅貼馬具の一部、雲珠 (馬の臀部につける装飾金具) や金銅装太刀金具の一部 (太刀の鏢・太刀の鞆尻・鞆の足金具) などが出土している。また、多数の鉄鏃 (矢じり)・耳環・ガラス玉・切子玉 (水晶) 等の貴重な遺物も出土している。その他 提瓶 (耳にひもを通し今日の水筒のようにして使っていたもの)・蓋坏 (蓋の付いた飲食物を入れる器)・甕 (孔に竹の管をさし、水を注ぐのに用いた) などの須恵器も出土している。

⑩ 東大谷 2 号墳

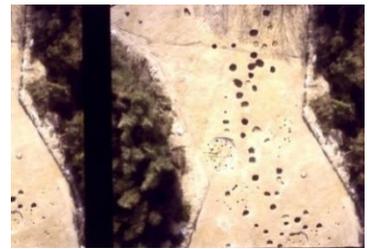
1 号墳の東の畑の中にあり、横穴式石室 (石室長 1.6m・奥壁幅約 1.4m・奥壁高約 0.9m・天井石 1 枚) を持つ古墳時代後期の古墳。出土品、須恵器片。



上出部町の古代遺跡

⑪ ^{くまたりづか}草足塚西遺跡

山王台地の字草足塚の西の南北に延びる丘陵の尾根上に、弥生時代後期



(3 世紀頃) の集落跡の遺構である。竪穴式住居跡 6 軒・段状遺構 1 軒・貯蔵穴と思われる土壇 100 基が発掘された。

遺物は、弥生式土器・土師質土器を中心に、石器・銅鏃 (青銅製の矢じり)・分銅形土製品 (天秤ばかりの分銅に似た祭祀用具) などが出土した。現在、四季ヶ丘団地になっている。

⑫ 草足塚東遺跡

草足塚西遺跡の東側に広がる丘陵の斜面に、弥生時代中期 (2 世紀頃) を中心と



した土壇墓群 (竪穴を掘り遺体を埋葬した遺構) が発掘された。大きいものは長さ 1.8m 木棺を押さえていたと思われる側石も残されていた。この時期の土壇墓群発掘は井原市初で当時の埋葬を知る貴重な史料であると発掘者は語っている。遺物として、弥生式土器片・土師質土器片・ガラス玉などが出土した。現在、四季ヶ丘団地になっている。

⑬ ^{ごんげんびら}権現平西遺跡

山王台地の頂上部字権現平西方の、弥生時代後期 (3 世紀頃) の集落跡の遺構である。



竪穴式住居跡 1 軒・段状遺構 2 軒などが発掘された。遺物として、弥生式土器・石包丁・石鏃 (石の矢じり) などが出土した。現在、四季ヶ丘

団地になっている。

⑭ 権現平 1 号墳



権現平西遺跡の南に隣接したところにあり、横穴式石室（石室長約 5m・奥壁幅約 1.2m・奥壁高約 0.5m・天井石 1 枚）を持つ古墳時代後期の古墳。出土品、須恵器・鉄滓（鉄を製錬した時にできるくず）。現在、四季ヶ丘団地古墳公園内にある。

⑮ 権現平 2 号墳

権現平 1 号墳より 20m ほど南東にあり、横穴式石室を持つ古墳時代後期の古墳。出土品、須恵器・土師器・鉄器・鉄滓。現在、四季ヶ丘団地になっている。



⑯ いいざんみがしひら 飯山東平古墳

県道下御領井原線沿いの井原高校精研農場の南側の字飯山東平にあり、横穴式石室（石室長約 1.3m・奥壁幅約 0.9m・奥壁高約 1.1m・天井石なし）を持つ古墳時代後期の古墳であった（平成 10 年頃まで）が、現在は土砂採取により墳丘はほとんど破壊されている。



⑰ 飯山古墳

飯山東平古墳の南西、飯山山頂にあり、箱式石棺（石室長約 2.5m・奥壁幅約 0.7m・奥壁高約 0.6m）を持つ古墳時代初期の円墳である。石棺側壁は川原の石積で朱の塗装跡（死者の魔除けと防腐効果のため）があった。出土品、鉄剣。



笹賀町の古代遺跡

⑱ たてあな 金敷寺裏山竪穴式墳丘墓

（井原市指定史跡・昭和 50 年 9 月 16 日指定）

経ヶ丸山へ登る山道の途中を東に進み、金敷寺の真裏の尾根上にあり、弥生時代末期から古墳時



代初期にかけて造られた墳丘墓である。墳丘墓内の土砂の流出を防ぐ葺石が方形に葺かれていることから方墳と考えられる。墳丘の中央に墓穴が掘られ、周囲は竪穴石槨（石の囲い）（石室長約 2.6m・壁幅約 0.7m・深さ約 0.6m・割石で積み上げ、平らな 6 枚の天井石）でおおわれている。床には、熟年男性の人骨が 1 体、墳丘周辺から、吉備地方特有の特殊器台や特殊壺の破片が出土している。この墳丘墓は市内で 1 番古く、弥生時代から古墳時代への移行期の墳丘墓として貴重な遺構である（墳丘墓は墳墓とも言う）。

⑲ があつき 川附古墳

川附霊園の下にあり、横穴式石室（石室長約 3.3m・奥壁幅約



1.3m・奥壁高約 1.2m・天井石 3 枚) を持つ古墳時代後期の古墳である。出土品はないが、その南斜面山すその畑から、弥生式土器片・須恵器片・土師質土器片が、市内遺跡分布調査により確認されている。

⑳ ^{くじら} **鯨古墳**

丑寅神社の谷を挟んで西側山ろくの字鯨にあり、横穴式石室（石室長約 3.1m・奥壁幅約 1.4m・奥壁高約 1.3m・天井石なし）を持つ古墳時代後期の古墳である。出土品はないが、古墳前の谷すそに広がる畑には、土師質土器片が遺跡分布調査により確認されている。



下出部町の古代遺跡

㉑ ^{ふもとだに} **麓谷 1 号墳**

山足織物社宅の西の山道を少し南に進んだ字麓に、横穴式石室（石室長約 5.5m・奥壁幅約 1.4m・奥壁高約 1.4m・天井石 4 枚）を持つ円墳と思われる。古墳時代後期の古墳である。出土品はなし。



㉒ **麓谷 2 号墳**

1 号墳より少し西にあり、古墳時代後期の横穴式石室を持つ古墳であったが、現在破壊され、石材が散乱しているのみで規模など不明である。

㉓ ^{かりやま} **刈山 1 号墳**

いずえ駅の南方・字刈山 戸木荒神山城への登山道の入口附近の東側に横穴式



石室（石室長約 3.9m・奥壁幅約 1.4m・奥壁高約 1.4m・天井石 4 枚）を持つ古墳時代後期の円墳がある。出土品なし。

㉔ **刈山 2 号墳**

1 号墳より少し北東方向に、横穴式石室（石室長約 1m・奥壁幅約 1.5m・奥壁高約 0.7m・天井石 1 枚）を持つ古墳時代後期の古墳がある。出土品なし。しかし、その周辺の畑から土師器片や須恵器片が見ついている。



㉕ ^{みつねたに} **狐谷 1 号墳**

出雲池の堤防の少し東に進み、字狐谷の山麓に、横穴式石室（石室長約 3.5m・奥壁幅約 1m・奥壁高約 1.6m天井石 3 枚）を持つ古墳時代後期の円墳がある。出土品なし。



㉖ **狐谷 2 号墳**

1 号墳より少し山頂方面に、横穴式石室（石室長約 5.4m・奥壁幅約 2m・天井石 2 枚・石室が半壊している）を持つ古墳時代後期の古墳がある。



㉗ **狐谷 3 号墳**

2 号墳より少し山頂方面に、古墳時代後期の横穴式石室と考えられるが石材が、長さ 4m・幅 1.8mにわたって散乱している。

⑳ せきとうびら 関東平古墳 (石塔山古墳) せきとうやま

(井原市指定史跡・昭和40年8月25日指定)

石塔山山頂より少し北、大江町木田と下出部町関東平の境にある古墳で、井原市は石塔山古墳(大江町)としているが、



出部にいにしえ会は関東平古墳と主張し、わがまち出部には、関東平古墳として掲載している。古墳時代中期の直径約15mの円墳で墳丘中央部に竪穴式石室(石室長約3.5m・奥壁幅約0.9m・奥壁高約1m・天井石6枚)があり、石室には、かたまり状の割石が使用され、側壁は上に行くほどせり出すように築かれている。昭和34(1959)年倉敷考古館の調査で石室より赤色顔料が塗られた男性の人骨・ガラス玉・鉄剣が出土している。

㉑ 岩崎山1号墳

岩崎山山頂から南へ下る斜面に長さ4m・幅1.7mにわたって石材が散在しており古墳時代前期の竪穴式石室の可能性が高い。



㉒ 岩崎山2号墳

岩崎山山頂部分に、長さ1.7mにわたり石材が拡がり、古墳時代前期の竪穴式石室の可能性が高い。(わがまち出部では、岩崎山1号墳として記載)



㉓ 岩崎山3号墳

2号墳より少し北にあり、竪穴式石室(石室長約2.7m・奥壁幅約0.9m・奥壁高



約0.5m・蓋石5枚)を持つ、古墳時代前期の円墳である(わがまち出部では、岩崎山2号墳として記載)。

㉔ 岩崎山4号墳

3号墳より少し北、竪穴式石室(石室長約5.6m・奥壁幅約1m・奥壁高約0.7m)を持つ円墳または前方後円墳と考えられる古墳時代前期の古墳。



(わがまち出部では、岩崎山3号墳として記載)

㉕ 岩崎山5号墳

4号墳より少し北、高まりに石材があり、長さ2.7m・幅0.8mにわたり石材が広がり、古墳時代前期の竪穴式石室の可能性が高い。

㉖ 岩崎山6号墳

5号墳より少し北の尾根上にあり、竪穴式石室(石室長約2.3m・奥壁幅約0.6m・奥壁高約0.5m・蓋石4枚)を持つ古墳時代前期の円墳。



(わがまち出部では、岩崎山4号墳として記載)

㉗ 岩崎山7号墳

6号墳より少し北、丘陵先端部にマウンド状の高まりがある。石室等は不明だが墳丘の可能性が高い。



このように岩崎山古墳が、4基から7基に増加したのは、平成10年度から、12年度にかけて市内遺跡の詳細分布調査により、遺跡の可能性が再確認されたためである。

◎井笠鉄道廃線跡

追加①-1 下出部停留所（駅）跡

井笠鉄道は、大正2年（1913）井笠軽便鉄道(株)として発足、大正4年（1915）井笠鉄道(株)に改称、大正14年（1925）に高屋線（井原～高屋間）が開通、昭和5年（1930）には神高鉄道が開通、昭和15年(1940)神高鉄道を買収し、神辺まで延長された。

地区民の足として大いに利用された井笠鉄道も、道路整備によるバス路線の発達や自家用車の普及により、昭和42年（1967）3月31日のさようなら列車を最後に、4月1日廃線となった。

下出部停留所は井笠鉄道出部駅から西1km、現在の井原鉄道いずえ駅の西、高架下側道が北側から南側に変わる地点にあった。

左写真は、西から駅跡を見たもの。右写真は、旧山陽道から駅前に通じる道路で、少し坂道になっていた。



追加①-2 下出部高架下狭軌線路跡

井笠鉄道・神辺線は、昭和42年（1967）廃線になり同年、井原鉄道建設のため線路用地として鉄道建設公団に買収された。

下出部町から上出部町の岩山神社辺りまでは井笠鉄道廃線跡地の上に井原鉄道が走っている。その証拠の遺構として溝に掛かっていた橋脚の桁跡の鉄筋が残っている（井原市内では遺構が残っているのは少なく貴重）。

井笠鉄道は、現在の鉄道標準のレール幅の広軌（軌間、1067mmは国鉄〈現JR〉標準軌、1435mmは新幹線など国際標準軌）に対して、軌間が狭い狭軌（軌間：762mm）を採用していたことがこの鉄筋コンクリートの断面によりわかる。



◎高屋町との境

追加② ^{かくおと} 角落しの史跡

大水のとき、高屋川の水があふれ、東の家後屋地区に水が流れ込むのを防ぐため、角板を落し、水をせきめる施設跡がある。



- 旧山陽道の南側の角落し
常夜灯や金毘羅社の後側にある。
- 旧山陽道の北側の角落し
道路を挟む形で残っている。



出 部 地 区 年 表

	2～3世紀		草足塚東・西遺跡から、土壙墓群や集落跡が発掘された。
	3世紀末 ごろ		金敷寺裏山墳丘墓(市内最古)が造られた。人骨一体、特殊器 台や特殊壺の破片が出土した。
大和時代 (古墳時代)	4世紀		大和朝廷が全国を統一し、吉備の国も大和朝廷の支配下に。
	4世紀末 ごろ		上出部飯山山頂箱式石棺、下出部岩崎山山頂石槨式石棺など の古墳が造られた。
	5世紀ごろ		下出部関東平堅穴式古墳が造られた。
	535	安閑 2	このころ来履屯倉(こほつみやけ)、膽年部屯倉(いとしべみや け)など、屯倉が設置されたことが日本書紀に記されている。
	6～7世紀		権現平古墳など、数多くの横穴式石室のある古墳(出部七つ塚 など)が造られた。
	645	大化 元	「大化の改新」の国・郡・里制により、後月郡(しつきこおり) が置かれた。
	683	天武 12	このころ、吉備の国が備前・備中・備後に分けられ、諸国の 境界が定められた。
奈良時代	715	霊亀 元	里制を郷に改め、さらに郷を分け、新たに里を置いた。
	737	太平 9	笹賀に南斗山金鋪寺(7堂伽藍・12僧坊)が建立された。
平安時代	860	貞観 2	上出部・下出部・笹賀・敷名・高屋の5か村の協力により宮 原八幡宮(現下出部八幡神社)が建立された。
	934	承平 4	「和名抄」に、出部郷などの名が記されている。
	1001	長保 3	祇園牛頭天王宮(現武速神社)が神輿山に建立された。
	1184	寿永 3	鎌田兵衛尉正清の子、藤太盛政、藤次光政兄弟が源義経に従 い一の谷に向かった。
鎌倉時代	1192	建久 3	源頼朝が鎌倉に幕府を開いた。
	1251	建長 3	出部郷の禰屋千一(ねやせんいち)が吉備津神社の役人に任じ られた。
南北朝時代	1382	永徳 2	武速神社が現在地に移された。
戦国時代	1553	天文 22	毛利元就親子、尼子党の猿掛城攻めのため、出部・井原に陣 を構えた。
	1555～ 7	弘治年中	戸木荒神山城主伊達大蔵が高越城の伊勢一族伊勢長盛と合戦 し、討ち死にした。
江戸時代	1600	慶長 5	関ヶ原の合戦ののち、後月郡・小田郡は徳川幕府の直轄領と なった
	1600		5 備中の国奉行小堀正次がこの地を治めた。
	1642	寛永 19	幕府直轄地となった。
	1661ご ろ	寛文 元	九沓池(くぐついで)が造られた。堤 145m・池面積 11,900 m ²
	1663		3 出雲池ができた。堤 109m・池面積 11,900 m ² 。
	1697	元禄 10	森和泉守(もりいずみのかみ)の所領となった。

	1704	宝永 元	岩山大明神(現岩山神社)が再建された。
	1706	3	幕府直轄地となった。
	1726	享保11	井原西国三十三観音霊場が開かれた。(出部地区16霊場)
	1813	文化10	脇坂中務大輔預かり領となった。
	1827	文政10	一橋家領地となった。
	1831	天保 2	安井権頭、男子40名女子16名を集め寺子屋を開いた。
	1857	安政 4	日芳橋が架けられた。
	1858	5	安井大賢、権頭と同規模の寺子屋を開いた。
明治時代	1868	明治 元	安芸少将鎮撫所となるが、同年8月再び一橋領に復した。
	1870	3	版籍奉還により、倉敷県となる。
	1871	4	深津県に所属した。
	1872	5	小田県に所属が代わった。出部地区は、上出部村・七日市村・下出部村・笹賀村・敷名村となった。上出部村にこの地方最初の郵便物取扱所ができる。
	1873	6	笹賀村・敷名村に権処小学、七日市村に剛志小学、下出部村に耕処小学が設立された。
	1875	8	岡山県の所属となった。上出部村と七日市村が合併して上出部村となった。笹賀村と敷名村が合併して笹賀村となった。
	1882	15	町村分合により、斉秀小学一校に統一された。
	1889	22	上出部村・下出部村・笹賀村が合併して出部村となった。出部尋常小学校(4年制)と改称した。
	1900	33	後月銀行七日市村出張所ができた。(1920年まで)
	1902	35	高等科(2年)を併設。出部尋常高等小学校と改称した。
	1908	41	義務教育が6年に延長された。
	1909	42	電話が出部にも設置された。
	大正時代	1912	大正 元
1913		2	井原・笠岡間に井笠軽便鉄道が開通した。
1915		4	井笠軽便鉄道が、井笠鉄道となった。小学校の移築が許可され、上出部町235番地の現在地に校舎新築、翌年落成。
1925		14	井原・高屋間に井笠鉄道が開通した。
昭和時代	1930	昭和 5	出部郵便局が開局した。
	1940	15	神高鉄道を買収し、井笠鉄道神辺線(井原～神辺間)が開通した。
	1941	16	太平洋戦争が始まった。小学校が国民学校になった。
	1942	17	出部村は井原町と合併した。
	1945	20	太平洋戦争が終わった。
	1947	22	日本国憲法が施行され。新教育制度が発足し、井原中学校が新設された。
	1948	23	出部農業協同組合ができた。
	1953	28	10か町村が合併して井原市が誕生した。

	1959	34	川附簡易水道が完成した。
	1962	37	出部農業協同組合は合併して井原市農業協同組合出部支所となった。 関東平古墳が発見された。 岡山で国体が開催され、井原市はホッケー会場となった。
	1964	39	県道井原・福山線が開通した。
	1966	41	国鉄井原線の起工式典が行われた。七日市町に井原鉄道建設所が開設され、上出部～木之子間の第1期工事が始まった。
	1967	42	井笠鉄道神辺線が廃止された。
	1968	43	出部地区に上水道が完成した。 金敷寺裏山墳丘墓が発掘調査された。
	1969	44	県道井原・福山線が国道313号線(福山～倉吉線)に昇格した。 出部小学校北の横断歩道橋ができた。
	1970	45	県道笠岡・井原線の山王バイパスが完成した。
	1971	46	井笠鉄道井原線が廃止された。 井原地区清掃工場が七日市に完成した。 林道経ヶ丸線が完成した。
	1973	48	上出部公園が完成した。
	1974	49	運動公園陸上競技場が完成した。 井原駅前土地区画整理事業が完成した。
	1975	50	出部公民館が完成した。 七日市交通公園が完成した。
	1976	51	運動公園野球場が完成した。
	1977	52	運動公園施設が完成した。
	1978	53	田淵公園が完成した。
	1979	54	市民体育館が完成した。 横田公園が完成した。 白海公園が完成した。
	1980	55	刈山公園が完成した。経ヶ丸グリーンパークができた。国鉄井原線の工事が中止された。
	1981	56	弦巻公園が完成した。
	1983	58	花野農村公園(藤公園)が完成した。
	1985	60	井原郵便局が七日市町2番地に新築移転した。
	1986	61	第3セクターの井原鉄道株式会社が設立された。
平成時代	1989	平成 元	「笹賀の仁王様」が県重要文化財に指定された。 井原浄化センター・公共下水路が完成し、七日市町・上出部町の一部の処理を始めた。
	1992	4	水掻公園が完成した。
	1994	6	生涯学習施設アクティブライフ井原が完成した。 大曲公園が完成した。

			岡山県井原地区清掃施設組合井原クリーンセンターが完成した。
	1995	7	出部西部公園が完成した。
	1998	10	林道出雲・相原線が完成した。
	1999	11	鉄道井原線が開通し、七日市町に井原駅、下出部町にいづえ駅ができた。 井原市農業協同組合が合併により、岡山県西部農協出部支店となった。 東大谷一号墳(横穴式石室古墳)の発掘調査が行われた。
	2000	12	出部小学校に新しいプールが完成した。
	2001	13	出部小学校新体育館落成した。 草足塚西遺跡の発掘調査の結果、弥生中期から後期の集落跡であることが立証された。
	2005	17	「第63回晴れの国おかやま国体」開催。井原市で「新体操競技」が行われた。出部地区民泊協会が発足した。
	2010	22	国道313号線に歩道橋「いづえにこにこばし」が新しく設置された。
	2012	24	出部幼稚園新園舎が完成した。
	2013	25	「いづえ地区まちおこし協議会」発足した。
	2015	27	新しい出部公民館が完成した。
	2018	30	岩山神社の末社、天神社が修復された。
令和時代	2019	令和 元	出部小学校が「学校安全」文部科学大臣表彰を受賞した。

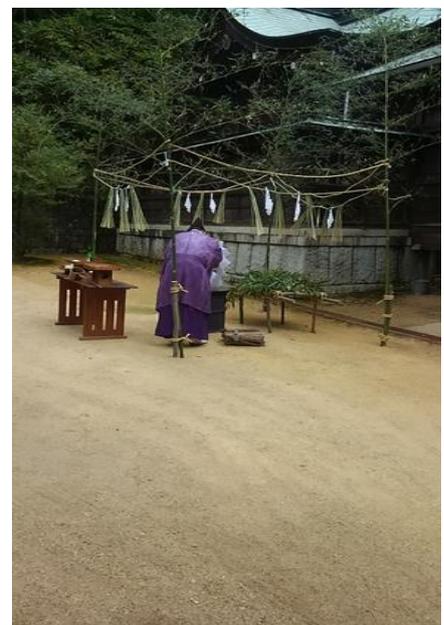


(杉の木三宝荒神社)



(備中神楽 猿田彦の舞)

出部地区に連綿と続く
歴史と伝統そして文化



(岩山神社 お湯釜神事)

あとがき

平成28年いづえ地区まちおこし協議会より、出部地区の史跡調査を依頼されました。そこで、出部歴史研究会を立ち上げ、地区別に史跡調査と史跡めぐりを繰り返し、2年間でその結果をまとめたのが、このふるさと探訪「出部の史跡」です。

そして、発刊後3年が過ぎ、「出部の史跡」は各方面より好評を博し、希望者に配布したり、新しい出部地区転入者に配布したりしたところ、在庫がなくなりました。そこで、この度再版することになりました。その際何か付加価値を付けようということになり、歴史研究会の井上猛志氏に出部の年表を付け加え、さらに初版本の誤記も修正していただきました。

どうか本書を手掛かりに皆様が実際に史跡めぐりを通して、史跡の由来や昔の人々の生きざまを知り、地域を再発見していただければと思います。また、次代を担う青少年に史跡についてご指導いただき、史跡に対する興味や関心がより深まり、郷土を愛する心が育てば幸いです。

最後になりましたが、熱心に史跡めぐりや原稿の検討をしていただいた歴史研究会の皆様、聞き取り調査にご協力いただいた出部地区の皆様、貴重な資料の提供をしていただいた井原市教育委員会、原稿や写真のパソコン入力から編集まですべて担当していただいた事務局長の岡田正樹氏など、ご協力いただいた多くの皆様方に心から厚くお礼申し上げます。

(執筆者 吉澤泰夫)

出部歴史研究会メンバー (あいうえお順 敬称略)

猪原 猛 井上 猛志 岡田 正樹 佐藤 桂子
橋本 泰宏 安井 佐代子 吉澤 泰夫

資料・情報提供など協力者（あいうえお順 敬称略）

(七日市町)	金高 洋子	川本 孝子	佐能 正俊	寺地 照雄
	藤代 昇	藤森 茂	安井 信昭	山本 敏信
(上出部町)	岡田 憲行	阪田 宗道	常国 晴代	土井 義宏
	原田 常司	原田 順行	廣井 計之	三宅 富美子
	安井 淳良	山崎 浜子	吉岡 秀雄	
(笹賀町)	石丸 和郎	石丸 操五	石丸 隆海	出原 正徳
	岡藤 良二	木山 明	佐藤 純志	谷本 実
	高橋 雅廣	塚本 佳道	徳毛 宜善	鳥越 喜久三
	鳥越 武	名越 正二	浜田 公陽	久安 浪夫
	藤井 信男	藤井 秀典	細川 清	
	細羽 真知子	細羽 吉泰	三宅 孝明	三宅 翔史
(下出部町)	川相 剛孝	川上 元志	藤井 信也	山足 勝昭
	山足 善志	山足 恒夫	山足 範夫	山成 益之
	山村 昭嘉	山本 隆		
(井原町)	大島 千鶴			
(井原市教育委員会)	高田 知樹	(文化課)	首藤ゆきえ	(古代まほろば館)

参考文献

行程記—山陽道（5）		山口県文書館
備中江原八景絵図	安政 6年	井原市立図書館
岡山県後月郡誌（復刻版）	大正 13年	後月郡役所
井原市史Ⅰ・Ⅱ（通史編）井原市史Ⅵ（民俗編）	平成 13年	井原市
ふるさと再発見 わがまち出部	平成 11年	出部公民館
いにしえ第1・2・3号	平成 7・8年	出部いにしえ会
井原市遺跡地図	平成 13年	井原市教育委員会
井原の文化財	平成 12年	井原市教育委員会
武速神社	平成 19年	武速神社
七日市天王山大師院資料	昭和 58年	武速神社
岡山県の地名	昭和 63年	平凡社

書名	ふるさと探訪 出部の史跡 (改訂版)		
発行	いずえ地区まちおこし協議会 出部歴史研究会		
	〒715-0021 井原市上出部町 1219-2	☎	0866-62-3960 (出部公民館)
執筆者	吉澤 泰夫	編集者	岡田 正樹
題字	安井 佐代子	発行日	令和4年3月31日
印刷所	(株)プリントパック		—頒布価格実費—